

第60回東京都公民館研究大会記録

主 催 東京都公民館連絡協議会
大会事務局 国分寺市立公民館

目 次

1	第60回東京都公民館研究大会開催要項	1
2	東京都公民館連絡協議会会長挨拶	5
3	東京都教育庁地域教育支援部生涯学習課長祝辞	6
4	国分寺市長祝辞	7
5	基調講演（講師：新藤浩伸さん）	8
6	課題別集会	
	第一課題別集会（東京都公民館連絡協議会 職員部会）	25
	第二課題別集会（東京都公民館連絡協議会 調査・研究班）	34
	第三課題別集会（東京都公民館連絡協議会 委員部会）	40
7	アンケート集計結果	46

第60回東京都公民館研究大会開催要項

『個』から始まる社会教育
～人と人を結ぶ“公民館”の在り方について～

I. 開催趣旨

公民館は、地域特性に応じた講座の実施や公民館を拠点としたグループ活動の場の提供等、人々の学びの機会を保障し充実させるとともに、人々が交流しあう場所としての役割を果たしています。また、個人が学びたいと思うきっかけやタイミングはそれぞれですが、講座参加やグループ活動への参加により、新しい仲間や体験に出会える場が公民館です。

しかし、近年は、公民館以外にも生涯学習センターや学習館、NPO法人や民間主催のもの、インターネットやSNS配信等、個人が学ぶ場や機会は数多くあり、その選択肢は広がっています。また、新型コロナウイルスの影響を受け、人が集うことを制限されたことにより、「オンラインでつながる」という新しい手段も得ました。社会が変化し選択肢が広がるなかで、他者とかかわらず生きていく「個」を選択できる一方で、地域で「孤」立してしまう人の姿も見えてきました。

個人が尊重されながらも、人と人、人とグループが出会い、新しい仲間や居場所ができること、地域で集い学びあいの輪が広がっていくことが大切ではないでしょうか。その輪の中での気づきや見つけた課題は、暮らしのなかで活かしたり地域の課題解決につなげたりと、循環していきます。個人の興味関心や想いをきっかけに、教える側/教わる側ではない互いに学びあ関係性ができることで、みんなが主人公になりえます。

社会が大きく変化している今、時に支援者として時に伴走者として一人ひとりをサポートできるのは、“公民館”をはじめとする地域に根差した社会教育施設ではないでしょうか。『個』から始まり、人と人とを結ぶ公民館・社会教育の在り方について、共に考えましょう。

2. 主 催 東京都公民館連絡協議会（以下「都公連」という）

3. 後 援 東京都教育委員会、東京都市長会、東京都町村会、東京都市教育長会、
東京都町村教育長会、東京都市町村教育委員会連合会、国分寺市教育委員会

4. 日 時 2024（令和6）年 2月3日（土） 12時30分 ～ 16時30分

5. 会 場 国分寺市立本多公民館（基調講演〈対面〉・第一課題別集会・第二課題別集会）
国立市公民館（基調講演〈同時配信※〉・第三課題別集会）

※第三課題別集会参加者は、国立市公民館にて基調講演を聴講します。

講師は国分寺市立本多公民館で講演し、リアルタイムで国立市公民館へ配信します。

6. プログラム

12時00分～	開場・受付
12時30分～12時40分	開会あいさつ
12時40分～14時00分	基調講演
14時00分～14時10分	移動・休憩
14時10分～16時30分	課題別集会

7. 基調講演 【講 師】新藤浩伸さん(東京大学 大学院教育学研究科 准教授)

【テーマ】『個』から始まる社会教育 ～人と人をつなぐ“公民館”の在り方について～

8. 課題別集会

会場・人数	テーマ・報告事例概要	企画運営
第一課題別集会 【会場】 国分寺市立 本多公民館 (70人程度)	【テーマ】 公民館だからできる世代を超え人と人をつなぐ仕掛けや展開のある事業 公民館ロビーという場の力を活用したコミュニケーション空間は、人と人との討議を通して豊かな関係性を紡ぎだすことができます。その成功事例として、西東京市田無公民館「中学生と地域活動団体代表たちが各自関心のあるテーマで語り合う『SDGsロビーフェスタ田無』の成果と展望」を取り上げ、そこから得た気づきをグループワークでさまざまな観点から話し合い、各市の公民館事業の企画運営のヒントにさせていただきます。 【助言者】 田中雅文さん(日本女子大学名誉教授／国分寺市公民館運営審議会委員長／三鷹市生涯学習審議会・社会教育委員会議長) 【事例報告者】 山本裕美子さん(西東京市田無公民館分館長)	職員部会 【部会長市】 福生市
第二課題別集会 【会場】 国分寺市立 本多公民館 (70人程度)	【テーマ】 東京都公民館連絡協議会の未来を考えるあり方検討会の中間報告 都公連では、今年度に「東京都公民館連絡協議会の組織等検討委員会」が設置され、次の項目を検討することになり、議論が始まっています。 (1) 都公連の組織及び運営に関すること。(2) 都公連の事業に関すること。(3) 都公連の円滑な運営に必要な事項に関すること。(4) その他答申を検討するに当たって必要な事項に関すること。 検討委員会の進捗状況の報告を受けて、都公連そのものや抱える課題などについて話し合い、未来を考えます。 【助言者】 梶野光信さん(東京都教育庁 主任社会教育主事) 【事例報告者】 都公連調査・研究班	都公連 調査・研究班 伊東静一 岩松真紀 小笠原東生 増本佐千子 富田泰之
第三課題別集会 【会場】 国立市公民館 (60人程度)	【テーマ】 多様な人がつどい、学びあう公民館への挑戦 公民館は本来、利用者や参加者を限定せず、多様な人々が集まることができる地域の社会教育施設です。しかし、一般的に公民館は、子ども・若者や障害者などの利用が少なく、公民館からの積極的なアプローチが課題になってきました。本課題別集会では、国立市の取り組みから、「多様な人」がつどい、交流し、学びあう公民館のあり方について考えます。 【助言者】 間瀬英一郎さん(CESAくにたち事務局長／元国立市社会教育委員・元国立市公民館運営審議会委員) 【事例報告者】 土屋一登さん(リカバリーの学校@くにたち／一般社団法人眞山舎) 山本貫人さん(中高生の学習支援「LABO☆くにスタ」／「しょうがいしゃ青年教室」スタッフ) 鹿野諒太さん(NHK学園高等学校・校内居場所カフェ「よりみち」) ほか	委員部会 【部会長市】 国立市

9. 参加申込

参加対象	公民館運営審議会委員、公民館職員、社会教育関係者、生涯学習関係者、その他本研究大会に関心のある方、どなたでも参加できます。
参加費	1,000円（銀行振込、手数料は自己負担）

【申込の主な流れ】

- ① 「申込書」を大会事務局へ提出する
- ② 「受付確認」の連絡を大会事務局より受ける
- ③ 「参加費」を振り込む

申込方法	【都公連加盟市(昭島・小金井・小平・国分寺・国立・西東京・福生・狛江・東大和)の方】 お住いの市の公民館へ、 <u>別紙申込書【A】</u> を提出 (こちらの申込方法の場合のみ、現金での支払いも可能)
	【都公連加盟市(上記参照)の関係者（職員や審議会委員など）】 各市で取りまとめのうえ、 <u>申込書【B】</u> を大会事務局へメール送信 後日、請求書を送付いたしますので、振込先へご入金ください
	【都公連加盟市以外の方】 下記のいずれかの方法で、 <u>別紙申込書【A】</u> を大会事務局へ提出 <提出方法> 持参・郵送・メール・FAX
	【注意事項(共通)】 ・会場の収容人員等の都合により、ご希望の課題別集会に参加できない場合もあります。 申込書には必ず第1希望から第3希望までご記入ください。 ・手話通訳をご希望の方は、申込書にその旨ご記入ください。
申込期限	12月20日(水)
支払期限	1月19日(金) ※受付確認の連絡後、振り込み先へご入金ください。(振込手数料は自己負担) ※期限までにご入金がない場合は、申込をキャンセルさせていただきます。 ※参加費の返金はありません。(資料は後日お渡しできますので、ご相談ください)
振込先	多摩信用金庫 国分寺支店 普通預金 (口座番号) 3119752 (口座名義) トウキョウトコウミンカンレンラクキョウギカイ 東京都公民館連絡協議会 トウキョウトコウミンカンケンキョウタイカイジ ムキョクチョウ ホンダ ヨシコ 東京都公民館研究大会事務局 本多美子

10. 会場案内図

【国分寺市立本多公民館（基調講演〈対面〉・第一課題別集会・第二課題別集会）】

〈住 所〉国分寺市本多1-7-1

〈電話番号〉042-321-0085

- ▶ JR・西武鉄道 国分寺駅 北口より徒歩約8分
- ▶ 北口より3つ目の信号を右折

※本多公民館駐車場の利用ができず
代替運用期間中のため、
ご来館の際は公共交通機関をご利用ください。



【国立市公民館（基調講演〈同時配信〉・第三課題別集会）】

〈住 所〉国立市中1-15-1

〈電話番号〉042-572-5141

- ▶ JR 国立駅 南口より徒歩約6分
- ▶ 南口より富士見通りへ、2つ目の信号を過ぎてすぐ

※国立市公民館駐車場は「おもいやり駐車場」
2台分しかありません。
ご来館の際は公共交通機関をご利用ください。



11. その他

開催要項・本研究大会の報告（後日掲載）は、都公連ホームページからもご覧いただくことができます。下記URLまたは二次元コードからアクセスしてください。

【URL】<https://tokyokouminkan.wixsite.com/tokoren>



都公連ホームページ
二次元コード

問合せ・申し込み

第60回東京都公民館研究大会事務局
国分寺市教育委員会 教育部公民館課 本多公民館

【住 所】〒185-0011 国分寺市本多1-7-1

【電 話】042-321-0085 【F A X】042-322-2376

【Eメール】honda-kouminkan@city.kokubunji.tokyo.jp

2.東京都公民館連絡協議会会長挨拶

第60回東京都公民館研究大会開催に当たって

本日は、第60回東京都公民館研究大会に多数の方のご参加をいただき、東京都公民館連絡協議会を代表し、厚く御礼申し上げます。

今年度の研究大会は、令和5年5月に新型コロナウイルス感染症が「5類感染症」に移行され、ポストコロナ・ウイズコロナの時代といわれ、日常を取り戻しつつある中での開催となりました。新型コロナウイルス感染症の影響を受け、学びに様々な制約がある中、インターネットの活用による新たな学びが一般的になり、「個」による学びも普及されてきたものと思います。

今回の研究大会のテーマ、「『個』から始まる社会教育 ～人と人を結ぶ“公民館”の在り方について～」については、公民館を取り巻く環境の変化を受け、これからの公民館の進むべき道を模索し、公民館の「集う」、「仲間づくり」、「地域の課題解決」を支援していくという機能・役割を改めて見つめなおす一助となるのではないのでしょうか。

本日、基調講演には東京大学の新藤先生をお招きし、研究大会のテーマに係る貴重なお話をいただきます。その後、課題別集会では日本女子大学名誉教授の田中雅文先生、東京都教育庁主任社会教育主事の梶野光信さん、CESAくにたち事務局長の間瀬英一郎さんからご助言をいただきながら議論を深めていただき、参加された皆様のこれからの学習や仕事に活かしていただけるものと思います。

本大会が、参加された皆様にとって有意義で実りある大会となることを期待しております。

結びに、本大会で事務局を担っていただいた国分寺市公民館の皆様、基調講演の講師、課題別集会の助言者並びに事例報告者の皆様、また、本大会開催に当たってご支援・ご協力をいただいた関係機関・関係者の皆様に東京都公民館連絡協議会を代表いたしまして深く感謝申し上げます、開会に当たってのご挨拶といたします。

令和6年2月3日

東京都公民館連絡協議会
会長 鈴木 遵矢

3. 東京都教育庁地域教育支援部生涯学習課長祝辞

祝辞

第60回東京都公民館研究大会が、国分寺市をはじめ関係者の方々の御尽力により開催されますことを心からお祝い申し上げます。

公民館は各地域の実情や特性を踏まえながら、地域住民同士が共に学び、活動する社会教育の拠点として、人づくり、地域づくりに貢献してきています。地域コミュニティづくりなどに向けて、一層の機能強化が公民館に求められているところです。

この間の新型コロナウイルス感染症の拡大は、地域における学習拠点としての公民館が積みかさねてきた実践やつながりに大きな影響を与えた一方で、オンラインの活用などにより、これまで公民館と出会ってこなかった地域住民とのつながりや、つながりづくりの新たな可能性を見出した側面もあったかと思います。

今回の研究大会のテーマ、「『個』から始まる社会教育～人と人を結ぶ“公民館”の在り方について～」は、公民館がこれまで積み重ねてきました実践や経験等を踏まえながら、アフターコロナにおいて、これからの公民館が担うべき役割等について活発に協議をしていただくことにふさわしいテーマだと思います。本研究大会の成果を今後の公民館活動に生かされることと期待しています。

最後に、本研究大会が実り多いものになるとともに、皆様方の御健勝と御活躍を祈念申し上げます。

令和6年2月3日

東京都教育庁地域教育支援部生涯学習課長
荒木 進太郎

4.国分寺市長祝辞

第60回東京都公民館研究大会の開催にあたって

第60回東京都公民館研究大会がここに開催されますことを、心よりお慶び申し上げます。

また、平素より公民館活動を通じて地域活動に取り組まれていることに対し、改めて感謝を申し上げます。

公民館は、地域住民にとって「つどう」・「まなぶ」・「むすぶ」場として非常に重要であり、また身近な社会教育施設です。本市においても本多公民館の前身となる国分寺町公民館が設置されてから、令和5年4月で60年を迎える節目の年となり、この間多くの住民の方々の活動拠点として利用していただいております。

新型コロナウイルス感染症の影響により利用者は一時的に減少しましたが、徐々にコロナ前の活気ある公民館に戻りつつあります。

今回の研究大会のテーマは「『個』から始まる社会教育」、副題は「人と人を結ぶ“公民館”の在り方について」となっております。個人を尊重しつつ、新たな出会いを通じて自分の居場所ができること、またそこから地域活動に発展し、みんなで助け合う・支え合うことにつながるのではないのでしょうか。

本研究大会を通じ、本日ここに集いそれぞれの立場で公民館活動について意見を交わすことで、共に学び合い、人と人とのつながりや絆を深め、地域コミュニティの醸成が図られることを願っております。

最後に、基調講演をお引き受けいただきました新藤浩伸先生をはじめ、課題別集会助言者並びに事例報告者の皆様、そして、大会開催にご支援をいただきました関係者の皆様に、心より感謝を申し上げます。

令和6年2月3日

国分寺市長 井澤 邦夫

**第60回東京都公民館研究大会
基調講演**

『個』から始まる社会教育
～人と人を結ぶ“公民館”の在り方について～

講師

東京大学大学院教育学研究科

新藤浩伸 さん

【企画運営】東京都公民館連絡協議会 企画委員会

『個』から始まる社会教育

～人と人を結ぶ“公民館”の在り方について～

東京大学大学院教育学研究科 新藤浩伸さん

Ⅰ 公民館と社会教育・生涯学習をめぐるイメージ—学生との議論から

いただいたテーマは「『個』から始まる社会教育」ということです。

まず、このテーマを最初にいただいたときに、正直に申し上げますとちょっと戸惑いました。「個」を前面に打ち出すことで社会教育について考えるというのは、なかなかチャレンジingだな。が、とても魅力的で面白いテーマだと思いました。つながりということを第一に考えるのが社会教育の性格かと思いますが、その中で個というものを一体どのように考えたらいいのか、これはなかなか難しい、ですが、そこにチャレンジしようということで、皆様からの投げかけに、私なりに今、考えていることをお話したいと思います。



私は今、大学で社会教育・生涯学習についての授業、ゼミを持っておりますが、公民館あるいは社会教育・生涯学習について学生たちと話す中で、どんなイメージを社会教育や公民館に持っているのかということを聞きます。おおむね世間的な生涯学習あるいは公民館のイメ

ージそのものであります。今回の集会テーマの説明の部分にも書かれていますが、YouTubeやZoomなどのオンラインツール、デジタルツールが様々ある中で、別につながらなくてもいい、つながらなくても何とかなんとか、別につながりたいとは思わないというような、やや冷めた、しかし学生世代であれば当たり前だと思ような意見が聞かれます。私の学生時代もそう思っておりました。

生涯学習という言葉のイメージですが、高齢世代の趣味の活動のようなイメージがあり、生涯学習という言葉で学生たちの様々な活動、学習活動、文化活動が語られない、考えにくいといったことも聞かれます。

また、公民館というものが、しばしば言われることではありますが、高齢世代の集会所、趣味の活動の場所というイメージが邪魔をしてか、若者と公民館はなかなか距離が遠いようです。たしか去年の大会でもこの会場でこんなテーマで学習会を持ったように記憶しております。

その中で、生涯学習という言葉、あるいは公民館というものが持っているイメージを少し変えていく必要があるのではないかと、学生と話す中で感じております。

学習の個別化という現象ですが、これは日本に限ったことではありません。先日、ノルウェーで生涯学習の研究をされている方が東大にいらっしゃってゼミの機会を持ったのですが、「孤独な学習」、isolated learningについて話をされました。北欧は、集団をつくって、アソシエーションをつくって学び活動をする、様々な福祉の活動などが伝統的に活発です。そういう国であっても学習の個別化、孤独化、個人化

という現象は起きているという話を聞く中で、別に日本に限ったことではない、国際的に見られる生涯学習の動向であるということを感じました。

次に「高齢世代の多様化」についてです。今、学生の中にも社会人の院生の方、いろいろな世代の方がいらっしゃいますが、その中のお一人の方が、いつまでも「お達者クラブ」式の生涯学習でよいのか、という話をしていました。その方はカルチャーセンターの運営企画にも関わっておられる方ですが、いわゆる高齢世代の趣味・余暇の活動をこれまでのように組織化していくことが、高齢世代の多様化に伴って、少し難しくなっているのだということを聞きました。確かにそうです。生涯学習という言葉が喧伝されてもう40年以上経ちます。一口に高齢者といっても、世代も関心も多様化しています。社会も変わっています。そういう中で従来型の趣味・余暇中心の生涯学習のイメージで、そのイメージを再生産していくような学習機会の提供の在り方でよいのかということを、生涯学習を提供する側でも感じている。その中で、この生涯学習なるもののイメージを、私たちは考え直していく必要があるのではないのでしょうか。

ただ、一方であまりイメージにとらわれてしまうと、私たち自身が、この生涯学習なり公民館というイメージにとらわれてしまうところがあります。イメージから出発することで見えなくなるものもあるような気がしますので、なるべくイメージではなく実態に即して語りましょうよ、ということを学生とは話をしているところです。

2 コロナ禍を経て

「個」ということに関わってコロナ禍の問題は避けて通れないのではないかと思います。ここ数年間、特に社会教育に関わる私たちはコロナの時代をどう考えていくのか、どのように日々の運営、公民館の運営、社会教育の事業

を考えていったらよいのか、お悩みになられたかと思います。

私も非常に悩みました。といいますのは、社会教育の根幹である「集まる」ということができなくなってしまった。特に2020年、2021年、社会教育の息の根を止められてしまったなど、ちょっと大げさかもしれませんが、そんなふうに感じていたこともありました。

そういう中で学生と話したり考えたりしたことがあります。ある学生がこのように表現しました。コロナの中で「遠い人と近くなり、近い人と遠くなった」と、これはなかなかうまくいことを言うなと思いました。つまり、オンラインコミュニケーションが出てくる中で、いろいろな遠くの人と話せるようになった。これは間違いなくよかったことだと思います。一方で、近い人と会えなくなったということで、このオンラインコミュニケーションというのは、よくも悪くも私たちの人と人との距離を均質化することになったのかなと思います。

また、GIGAスクールという言葉が飛び交いましたが、学校にICTがどんどん導入されてきました。一方で、社会教育分野の立ち遅れが、目立つのではないかと思います。

ただ、災害には非常に弱い部分もあるようで、先日の能登地震での実際の話として、北陸出身の学生が以下のような話をしてくれました。GIGAスクールでタブレットを1人1台、学校に導入しましたが、被災した学校ではWi-Fiどころか学校の運営自体すら難しくなってくる中で、オンライン学習というのがそもそもできなくなって対面に戻ったという話です。オンラインは万能のようであるが、災害時には非常にもろい。オンライン、デジタル技術というものを社会教育分野でもっと活用していくべきだということは、いろいろなところで聞かれる話ではあります。一方で、デジタル技術というのは万能なのかという点必ずしもそうではない。ユネスコが最近このようなことを言っていますが、「デジタル技術は教育機関の代替にはならないし、格差を拡

げるのではなく縮めるために使われねばならない」と言っています。これも非常に重要なことかと思います。

では日々の社会教育、公民館の活動をどのようにしていったらよいのでしょうか。私が出会った1つの実践を紹介します。福生市公民館白梅分館の花壇づくりの活動です。当時、この公民館の職員であった菊池稔さんは環境教育を学ばれた方で、今は名寄市立大学の教員をされています。花壇を公民館職員と地域の方々と一緒につくるということを、コロナ以降始めたそうです。これは一見、ある意味、地味な活動なのかもしれませんが、私はそれが当時とても心に響いたことを強く覚えています。花壇という、ともすると通り過ぎてしまうようなものに目を向け、目の前の足元の花の美しさや、命の息吹、土の匂い、それをみんなで感じながら花壇をつくっていくという活動。菊池さんがおっしゃっていた言葉ですが、「命には命を癒す力がある」と表現をされていました。それは私の心にとても響いた言葉でした。その命というものがなかなか身近に感じられなくなったコロナの中で、「そうか、こうやって花というものを介して人と人がつながる、こういう実践の活動を公民館はつくれるのだ」と、今さらながら私は発見しました。お恥ずかしいのですが、こういうところで公民館は力を発揮するのだと、ちょっと目を開かれた活動であったと感じました。恐らくここに限らず、こういった地道な活動がコロナ以降いろいろところで展開されていたのだと思います。

『月間社会教育』という雑誌、以前は国土社というところから、今は旬報社から発行されていますが、その編集長をやっていた時期にコロナと重なりました。この状況を全国的にどう共有し、どんな情報を発信していったらいいのかということを編集員の方々と模索しながら考えて、例えば在宅学習の支援であったり、各地で展開されているNPOであったり障害者の生活、コミュニティシネマ、子ども食堂等々の活動を

紹介して共有するというのを少しずつ進めてまいりました。果たして何ができたのか。もっとできることがあったのではないかと反省はしています。しかし、全国の方々から情報をいただきながら、社会教育は頑張っているぞということを発信し記録に残してきたということ、私なりにしてきたつもりです。

コロナの中で、社会教育だけではなく多くの専門家の方々が、これからの社会をどういうふうに構想するかということの本やネットなどで発信されてきました。そういう中で、幾つか私の心に残ったことをご紹介します。

宇野重規さんという政治学者は、このコロナという機会を、民主主義をバージョンアップさせるチャンスと前向きに捉えてはどうかとおっしゃっています。『民主主義とは何か』という新書などもお書きの方です。「コロナというウイルスの脅威にさらされる中で人間や自分というものを中心に物事を考えない、そのような思考の転換のチャンスではないか」とおっしゃるのは作家の根本美作子さん。東浩紀さんという哲学者は、ネット万能主義のようにともするとされるが決してそうではないとのこと。マルクス・ガブリエルという哲学者は、この状況というのはローカルなレベルからの真の民主主義に向けたチャンスではないかと前向きに捉えて、新しい社会をこのコロナ禍の中で構想していると発信されています。

いま、コロナは一段落しておらずまた増えているにもかかわらず、この種の議論は少しばやけてきてしまっているように思います。あの時代を経験した私たちは、あの時代を忘れてはならないと思います。あのとき考えたことを学習の種にして次の一步を踏み出していく、ある意味、義務が、いや責任が、コロナを経験し生き延びてきた私たちにはあるのではないかと考えています。

その中で社会教育の課題として見えてきたことを私なりにお伝えしますと、特に弱い立場

に置かれた人たちの命と暮らしを守る学習が必要なのではないかということ。それから、共感と落ち着きの大切さ。ふわっとした言葉かもしれませんが、コロナの状況下で幾つかの公民館で学習会などに参加する中で、共感や落ち着きという言葉が比較的多くの方の心に響いたように私は実感として記憶をしています。誰にも会えない、デジタルでしか会えない状況で、私たちがどこか当たり前に生活する中で感じていた落ち着きであったり、人と人が出会ってコミュニケーションすることで得られる共感みたいなものを奪われてしまい、そうすると、何かフワフワした不安な状況の中で暮らしているように感じる。が、公民館に集って学習するというのは、私たちに不思議な落ち着きを与えてくれる。もちろん楽しさというのがありますが、不思議と誰かといくと落ち着くという感情をコロナ禍での学習会で私も感じましたし、そこに居合わせた方々と共有できたように思います。

不要不急という言葉が一時出ましたが、決して社会教育は不要不急ではないということです。仙台市で社会学級の活動に長年取り組まれている菅野澄枝さんという方はこのようにおっしゃっています。『私って不要不急なんだ。』新型コロナウイルス感染拡大防止に関する対応が強化され、公共施設に集えなくなるにつれ、耳にすることが多くなった言葉である。私はこう答える。『長年、地道な努力を続け、積み重ねてきた学びや地域のつながりは、生きていくのに必要不可欠。あなたみたいな人がいなかったら、社会は成り立っていません。』本当に大切なことは促成栽培されない。培った学びの中に、情報収集の手法、判断力、冷静な行動、発信するコミュニティがある。人の命と尊厳を守るために、1人でいても、それらを活用する時が今なのだと思う。これは2020年の緊急事態宣言の中で書かれた文章ですが、あのコロナの中にさらされた私たち社会教育の関係者にと

っては貴重な記録になるのではないかと思います。紹介をさせていただきました。

この経験を私たちはどのように糧にしていけるのでしょうか。社会教育がコロナを通じてどう変わったかと考えるより、やはりこれまでつくり上げてきた社会教育の成果や構造、地域の住民との関わりがどう試されたか、社会教育の意義をどう鍛えていくかというふう考えたほうが、地に足が着いた議論ができるのではないかと思います。

何より私たち自身が学びを止めてはならないということ、社会教育の原点を問うということです。オンライン化も当然重要ですが、何のための学びか、今、何を大切にすべきか、各地で問うことではないかと思います。私の考えとしては、人間として落ち着きのある時間や空間というものを守ることではないかなと思っています。京都大学の藤原辰史さんがおっしゃっていたことでもありますが、コロナの経験を記録して伝えていくということも重要ではないかと感じています。

3 歴史の中の公民館

この項目は皆様多くの研修であったり、本でお読みになっていることかと思いますので、あまり深掘りはしませんが、公民館というものが歴史的にどのようにつくられ、今日まで発展してきたかということは何度も何度も振り返ってよいことではないかなと思います。

ご承知のとおり、公民館が制度的につくられたのは第二次大戦直後のことであります。当時は、自治意識を育む地域の多目的施設として構想されております。ここで自治意識と書きしたのは、よく寺中構想と呼ばれますが、公民館の構想に関わった寺中作雄という文部官僚、この大会でも、昔、報告者として登壇をされていたようですが、その寺中さんがこの大会の中でおっしゃっていたことが、まさに自治を育む場所としての公民館。当時は憲法、新憲法の制

定普及ということもありましたので、憲法について学ぶということもセットで、公民館は構想され普及していった、普及が試みられていったということです。

それから重要なのは、単なる学習施設ではなく、多目的な施設であるということです。村のお茶の間であったり、民主主義の訓練場であったり、いろいろな言い方がされましたが、まさに多目的施設として公民館が構想された。この中でも、やはり自治の意識を育むということは公民館の1つの柱ではなかったかと思います。

1949年に社会教育法が制定される中で、制度的には学校と並ぶ教育施設と位置づけられていました。1960年代、70年代と整備が進み、都市の中の活動拠点と、特に東京都の文脈でいいますと、施設の拡充とともに都市の中での公民館ということが議論され、そして、この公民館も含めて都市型の公民館が整備されていったという時代があります。

1980年代になりますと生涯教育、生涯学習という言葉が浸透していきます。そうすると趣味や余暇の活動のための場所という、私たちおなじみの公民館、あるいは生涯学習のイメージがこの時代につくられていったのではないかなと思います。

時代が変わって2000年代以降になりますと、少子高齢化・人口減少といったことが徐々に言われていきます。そういう中で地域の多目的の拠点として、どう機能していくかということが議論され、そして震災やコロナを経た2020年代、私たちが生きる今では、人が集まりつながるという、今回のテーマにも関わりますが、この公民館のある意味原点というか、人間の活動の原点みたいなものが問われているのではないかと考えております。このあたりは皆様にもぜひお話、ご意見伺いたいところです。今、公民館はどういう役割、可能性を持っているのか。

これはみんな考えていきたい部分だなと思っています。

「近年の施設論の潮流」と書きましたが、公民館も含めて教育施設、文化施設がどのような役割・機能を果たすべきかという教育学の研究があります。いま大学院のゼミで、海外の文献も含めていろいろ読んでいく中で、どうも今、中心的なテーマになっていると思われることは、個ではないですね。むしろ、もっと個の活動や学びを社会や地域、他者にどうつなげていくか、広げていくかということです。そこでキーワードになっているのは、例えば公正であったりとか、民主主義であったりといったことを教育施設、文化施設、特に学校でどう育んでいくのか。ここ数年、学校において、政治の問題、民主主義というものをどう教えていくか、つまりシチズンシップの教育ということです。ご承知のとおり、なかなか投票率が上がらないということや、社会や公民を学んでも社会について知ったこと、あるいは社会に参加したことにはならないということがあります。学校、社会教育施設もそうですが、そういう中で地域社会の、特に政治的な問題、私たちはこの社会の中でどう他者と関わって生きていくかということを、きちんと子どもたちに伝えられてこなかったのではないか。社会で100点をとっても社会を知ったことにはならないし、選挙にも行かない。この社会の中で私たちがどう生きていくか、参加していくかという、そういうマインドを育むために、学校や社会教育は一体、何ができるのかということが、ここ数年、議論になっているように思います。

そういったことを、公民館に関わる私たちも少し考えていってもいいのかなと思うわけです。個人が社会の中で社会をつくり生きていくための知を育む公民館という言葉が、そう考えると非常に現代性を帯びてくるわけですね。個ではなく「公」なわけですから。そうすると、この終戦直後の自治意識を育むという部分が私はま

さに原点の部分だと思うのです。しかし、原点であって、一方で現代性を帯びた課題を公民館という名前が持っていますし、輝きを持つてくように思うわけです。そういう意味で、公民館という名前はこれからも大事にしていく必要があると私は思っています。

深掘りはしないとはいえ社会教育法は避けて通れないと思いますので、改めて社会教育法の中で公民館がどのように位置づいているかということにも触れておきます。条文の紹介にとどめますが、公民館は「住民の教養の向上、健康の増進、情操の純化を図り、生活文化の振興、社会福祉の増進に寄与することが目的である」と伝えています。

皆さんも何度もお読みになっている条文かもしれません。しかし読むたびに発見があります。趣味、教養だけではもちろんない。福祉のことであったり、健康のことであったり、とりわけ最近コロナ以降はこういった福祉・健康の部分というのは重視されてきているようにも思います。時代の中で注目される部分が少しずつ変わりながら、この公民館というものが持っている豊かさが、既にこの法制定の当初から条文に記されているということは重要なことだと思います。何度もこの法律に立ち返って、公民館とはどのような場所かということを考えていってもよいのではないかなと思います。

歴史を振り返る意味としては、箱物というのはいい意味でも箱物だなとも思うのですが、いろいろな機能が折り重なって、歴史の中で公民館の引き出しが増えてきているように思うのですね。高齢者の福祉であったり、市民余暇活動であったり、集会機能であったり、いろいろなことが注目される中で、公民館はあんなこともできる、こんなこともできるという議論と実践の積み重ねの中で、より魅力的な箱になっているのではないかなとも思います。そういう意味でも、歴史を振り返ることで、公民館がどんな引き出しを持っているのかということを私たち自

身、再確認する。その意味では歴史を振り返るというのは非常に重要なことかなとも思っています。

関連して、今回は60回大会ということで、東京都の公民館が達成してきたものについても触れておきたいと思います。都公連の議論の蓄積については、この後に紹介します。

もう一つは、「三多摩テーゼ」と呼ばれる「新しい公民館像をめざして」、これを今どう読むかということ。先ほどご紹介いただきましたが、私は西東京市で2011年から15年まで、ちょうど震災の年から4年間、公運審の委員を務めてまいりました。そういう中で公民館は、特に東京の公民館が持っている豊かさ、可能性みたいなものを感じてきましたので、それをご紹介させていただきます。

過去60回の東京都公民館研究大会がどんな議論をしてきたかということ、今回、都公連の皆様からいただいた資料を基に振り返ってみました。

第1回は1962年です。大会の主題、スローガンの部分を抜き出すと、具体的なテーマが分からないので、当時の課題別集会や、基調講演から、どんな話題が話されたかということ、私なりに書き直してここに紹介しております。例えば第1回では、「勤労青少年の実態と青年学級」、60年代を見てみますと、住民の要求にどう応えるかというテーマが続いています。都市公民館の在り方というものも模索されています。「公民館のあるべき姿と今日的指標」という文章が出される中で、そのあるべき姿とは何か、それを実現させるためにどうすべきかといったことも議論されています。

70年代に入りますとコミュニティセンターというものが出てくる中で、従来の公民館とコミュニティセンターがどのように違うのか。公民館の独自性は何かということが議論されるようになってきました。

また、例えば障害者の学習の保障といった個別のテーマが議論され、公民館活動が少しずつ豊かになってくる様子が、テーマからだけでも見えてくるように思います。1977年には、「公民館における学習権の保障」といったテーマも出てまいります。

80年代以降になりますと生涯教育や生涯学習、82年では「自治の時代・文化の時代」といった、当時を知る方には懐かしい言葉かもしれませんが、当時のキーワードなんかたくさん出てきます。その中で公民館がどうあるべきかということがずっと議論されてきます。80年代半ば以降では、21世紀をどう展望するかとか、生涯学習論が台頭する中での公民館の役割であったなどが議論されています。

生涯学習というものが体系化していく中で公民館が厳しい状況に置かれるということも、80年代後半以降はだんだん課題化されてきています。88年には公民館の置かれた厳しい状況といったことも議論されています。89年には「ユネスコ学習権宣言と公民館」。翌90年には「生涯学習振興法」と、生涯学習という言葉が制度的にも広がっていく中で、公民館はどのようにあるべきかということが、原点を模索しながら探究されている。それが80年代後半から90年代以降のことになります。

90年代になりますと、高齢化社会、学校週5日制、ボランティア、国際交流、環境問題といったような個別の現代的なテーマが出てまいります。90年代半ば以降になりますと行政改革ということが視野に入ってきます。例えば公民館運営審議会の必置が任意化される中で、社会教育、公民館の置かれる制度がだんだん切り崩されていくような状況もありました。その中で公民館はどうしていくべきかという議論もなされていきます。90年代後半以降、2000年代に入りますとNPOとの連携、学校週5日制をどう考えるかといったようなテーマ。

2010年代以降になりますと、これはもうまさに現代といってよいかもしれません。皆さんもご記憶に新しいところかと思いますが、例えば2017年では「持続可能な地域の未来」、2019年には「災害における公民館と職員の役割」、2020年、コロナの中でもずっとこの大会が開催されてきたことはすばらしいと思いますが、「コロナ時代に向き合う」、「地域課題解決学習」、「新しい生活様式」、「社会教育士の役割」といったように、このテーマを見るだけでも戦後が見えるというか、公民館を通じて東京の戦後、東京の社会教育の戦後が見えるのではと思います。

4 東京都の公民館が達成してきたもの

都公連というのは非常に記録を重視している組織だと思います。50周年のときにかなりたくさんの資料を丁寧にまとめられて、東京の公民館の歴史が克明に分かるようになっていきます。私も今日のためいろいろ読もうとしたのですが、もう読み切れないぐらいの文章がたくさんありました。30周年のときもそうでしたが、節目、節目に過去を振り返りながら未来を展望するということをこの都公連はやってきました。その歩みの堅実さは非常にすばらしいもので、そこに学ぶものはたくさんあるように思います。

もう一つ、三多摩テーゼにも触れる必要があらうかと思います。第1部「新しい公民館像をめざして」、この部分は皆様、いろいろなところで目にする部分ではないかと思います。これは1974年、ちょうど50年前につくられ、出された文章ですが、公民館の4つの役割として①たまり場、②地域活動の拠点、③大学、④文化創造の広場ということが打ち出されました。

7つの原則としては①自由と均等、②無料、③学習機関としての独自性、④職員必置、⑤地域配置、⑥豊かな施設整備、⑦住民参加ということが原則として打ち出された。これは東

京都教育庁が出したのですが、この三多摩テーゼと前後する形で、東京都の公民館の拡充が進んできた。本日の会場である本多公民館も含めて、多くの都市型の公民館が高い機能を持った集会施設として機能してきた。ただの貸し施設ではなくて、地域住民の活動を組織する職員が配置されて、様々な実践が行われてきたということは皆さんご承知のことかと思えます。

三多摩テーゼというのは2部構成になっています。今日皆さんのお手元の配付資料に、「三多摩社会教育通信」があるかと思えます。ここでも紹介されていますが、今年三多摩テーゼから50年ということで、その再評価、見直しがいろいろなところで進んでいます。そこでもなされているようですが、三多摩テーゼというと、第1部の施設論がよく注目されますが、第2部の職員論のほうも重要ではないかということがこの通信にも書かれています。私もそれを見て「ああ、そうか」と、ちょっと目が開かれたところがあります。今日は職員の方もたくさんお見えなので、ぜひ一緒に読んでみたいと思うのですが、公民館職員とは一体どのような役割なのかということがここに書かれております。

「あらゆる住民が自由に集会し、自主的に学習し、文化創造をめざすことは、民主主義社会における住民の権利です。公民館の存在理由は、この集会・学習・文化創造の権利を具体的に保障していくことにあります。この任務を全うするために、公民館職員は、次のことを確認し、実践します。」ということで、端的に5つのことが書かれています。本当はもっと長いのですが、まとめとしてはこういうことになります。1. 公民館職員は、いつでも、住民の立場に立ちます。2. 公民館職員は、住民自治のため積極的に努力します。3. 公民館職員は、科学の成果を尊重し、地域における文化創造をめざします。4. 公民館職員は集会・学習の自由を保障し、集団の秘密を守ります。5. 公民館職員は、労

働者として、みずからの権利を守ります。このことが第2部に書かれています。

ぜひ、何らかの形でこの三多摩テーゼの原本に、皆様触れていただきたいなと思います。今、読んでも、施設論もそうですし、職員論のほうも非常に豊かな内容を持っているものなのでご紹介をさせていただきました。これもまさに東京都の公民館活動が蓄積してきた事業の成果と考えています。

次は、私自身が見聞きした公民館の豊かさ、可能性についてお話しします。西東京の公運審の委員をする中で、私は西東京の住民ではなかったので、公民館の活動を見せてほしいと、できたら全館見せてほしいと当時の職員の方をお願いしました。かなり無理をお願いしたのですが、学生と一緒に西東京市の公民館全館を見学させていただくということをいたしました。私自身は生まれも育ちも田舎なのですが、都市型の公民館、都市における公民館の面白さというものが見えてきたように思います。

1つ目は、都市の中の人が集まる場所であるということです。私は大学から東京に出てまいりましたが、出てきてすぐはなかなか地域とつながりが持てずにフワフワした生活をしたわけです。公民館というのは都市の中で、非常に重要なこととしては人が集まる場所であるということです。ここがロビーであったり、レストラン、食堂であったり喫茶室であったり、いろいろな形で人が集まる場所ということ、これがある意味、私は公民館の一番根幹の部分だなと思いました。

公民館には、地域の様々な情報が置かれているチラシが配架されています。これも当たり前かもしれませんが、集まることで、そこに来ることで、この地域に暮らしているのだという生活実感を持てる場所だと思います。万事オンライン・ネット万能の社会のように見える今にあっては、生活実感というのはなかなか持ちにくいように思うのですね。買い物も食べ物も含めて、

ほぼネットで足りてしまう。やろうと思えば足りてしまうわけです。しかし公民館というのは、今この地域に生きているのだという生活実感を持てる場所であるということが2つ目。

西東京の公民館は、過去の館報や、記録を非常に重視されているところでしたが、人の輪があり、その活動が蓄積していく場所であるということです。どこでもそうですが、公民館の活動というのは博物館や図書館と違って、物や本があるわけではないので、人の活動がベースになるという中で、なかなかそれが記録として残りにくいということがあります。例えば公民館報や、講座のチラシのようなものがまさに公民館活動の記録として考えると1次資料になるわけですね。ところが、なかなかそういったものは記録として残りにくい。例えばチラシは講座、イベントが終わったら捨ててしまうということも多々ある中で、過去の記録を丁寧に記録して蓄積していくということが、地味かもしれませんが非常に大事なことになっています。市民活動のアーカイブといってもいいと思いますが、これはとても大事なことで、博物館関係のことを学んでいる学生の中にも、こういったことに関心を持っている学生もいます。図書館、博物館などと違って、公民館の活動というのは記録として残りにくいけれども、地域の歴史がそこに見えるので、とても大事ではないかということを研究している学生もいます。

次に、ロビーのにぎわいということです。資料にある写真は放課後に勉強したりゲームをしたりしている子どもの姿ですが、こうやってロビーに集まって、別に講座や授業に参加するわけではないけれど、放課後の時間をひととき過ごして帰るという、恐らくどの公民館でも見られる姿ではないかなと思います。このロビーの活動というのは非常に重要なことです。特に何らかのサークルに所属していなかったり、子どももそうですが、個人ベースで公民館に来る方にとっては、このロビーが非常に重要な空間になる。

最近、西東京の公民館を拝見すると、ちょっとした勉強のスペースをつくったり、個人利用を促進させるような取組をされているように拝見しますが、個人の活動も含めたロビーのにぎわいというものも重要な要素だなと思います。

また、非常に力を持った職員の方がそろっているということです。やっぱりコミュニティセンターと違うのは、住民の活動、住民の話を聞いて、それを活動へと組織していくコーディネートの方を持った方々がそろっているということです。そういった専門職員に支えられているということも公民館にはなくてはならない要素であるということを感じました。

5 昭島市での取り組み例 —一次の10年を見据えて—

西東京での私の活動は2015年まででした。私は去年から昭島市で公民館運営審議会の今は会長を務めております。これは私自身の今の取組ということになります。現在、昭島市公運審では「公民館の在り方」について諮問を受けています。昭島では大体10年に1度ぐらい、公民館の在り方についての答申を出しているのですが、コロナ直前に出された諮問に、コロナでなかなか答申が出せず、中間報告であったり、中間的なまとめ文書を幾つか出してきました。私はそれを引き継いで、答申をつくるという、なかなか荷が重い仕事ですが、委員の皆さんと一緒に取り組んでいるところです。

これがなかなか難しいこともあって、運審の委員としてご参加の方も今日はたくさんいらっしゃるかと思います。答申というのはどうしても美文・作文に終わってしまう。それからつくって終わりになってしまって、なかなか実効的な効力を持ち得ないのが悩ましいところがあります。なるべくそうならないような答申をつくりたいと考えて、せめてつくっていくプロセスは確かなものにしたいということで、これは私というよ

りは、副会長や委員の皆様の本当に頑張りがあるのです。サッとつくろうと思えば、会長・副会長一任で原案をつくって、お示しして、これでいいですね、というのが、もしかしたら手っ取り早いかもしれませんが。しかし、そうやってしまっではもったいないので、顧問の伊東先生にもご助言いただきながらゆっくり進めています。他市の公民館では答申づくりを本当に丁寧にやっているところがあるということをたくさん伺いました。例えば国立ですが、真剣に議論して丁寧につくられている、そこまでなかなか行けない部分もあります。しかし、私たちなりにできることをやろうということで、委員は10人いますけど、小グループで議論をして、KJ法で、私たちの意見を共有したり、私が大学で持っている社会教育ゼミ受講の学生に、昭島の公民館に調査に入ってもらい、彼らがその公民館を学生の視点からどう見るかということを考えてもらっています。今、レポートを書いているところですが、そのようなことを少しずつやっている中で、つくって終わりにならないような答申づくりをしようということ、若者の視点をできるだけ取り入れてみようということに取り組んでいます。授業では公民館の見学、個別の事業・講座に関心のある学生に参加してもらい、参加者に話を聞いたり、職員の方にお話を伺ったりしております。

その中で、学生たちが見た公民館の可能性というものが少しずつ出てまいりました。例えば、公民館、特に都市型の公民館というのは設備・空間が非常に豊かである。一方で、豊か過ぎて活用されていない部分もあるのではないかとということに目をつけて、昭島市公民館では、庭が非常に広くて多くの方が集まれる空間になっているのですが、そこをもっと活用してはどうか。最近テレビでよく報道されますが、昭島市の公民館の池にカルガモの親子が来て、お引っ越しをするということで、そのカルガモを見に来る市民の方もたくさんいらっしゃる。この公

民館にというよりはカルガモを見に来るわけですが、そういう方々に公民館に親しんでもらったり。また、放課後ダンスの練習をしている生徒さんもチラホラ見かけるのですが、もっと庭の部分を活用してもいいんじゃないかなということも学生は提案をしてくれています。

利用団体の多様性、横のつながりを生かすということも言われています。多くの公民館で利用団体紹介みたいな冊子をつくったり、あるいはホームページで公開されたりしているかと思います。そこに目をつけた学生がいて、これこそ地域の宝だと言うのです。人の活動、人のつながりみたいなものを、ぜひもっと生かしていくべきだという意見がありました。

もっと学校や大学との連携が必要ではないかということ、民間の活動への注目や連携が必要ではないか、専門職員がいるという公民館の特性、昭島には公民館と、市立会館という貸し施設ありますが、市立会館とは違って、公民館には専門職員がいらっしゃる。それを生かして、単なる貸し館ではない、地域のハブにしていこうというような意見。

理科系の学生はこんなことを言うのですが、ネット社会においては情報が氾濫し過ぎるぐらいにしている上に、デマのような情報に流されやすい。原発報道は特にそうでしたが、コロナもそうですね。確かな科学的な知識を育てていく公民館ということが構想できないか、そんなことを考えている理系の学生もいます。先ほどのアーカイブに関わりますが、活動の記録をもっと活用していくべきではないかということを考えている学生もいます。

公民館の中の個人利用をどう認めていくか。地域での最初の一步はなかなか踏み出しにくいという学生の意見もありました。そういう意味では今日、配付資料の中にある「私にもできるはじめの一步」、このような視点の活動はとても重要だと思うのです。1人で公民館を利用しづらいという意見が学生からは出ています。何

のグループにも所属していないけれど、何かちょっとやってみたいなと関心を持っている人たちをどう公民館につないでいくか。例えばロビーを工夫してみたりとか、夜間の利用はほかの時間帯に比べるとちょっと少ないので、夜間貸出みたいなものをもう少し工夫してみてもいいかといったような意見です。

こんな発見も学生がしてくれたのですが、若い世代の職員の新たな取組ということで、公民館の講座の中でも若い世代がなかなか来にくいという意見がある一方で、若手職員の方は若いセンスを生かして、例えばコスパ・タイパ重視の子育て講座ですとか、ベテラン職員の方ではなかなか思いつかないような現代的視点からの講座の企画なんかもされています。そういうところでガラッと変わることはないかもしれませんが、少しずつ若い世代の関心も取り込みながら公民館活動が進化している。そんなところも学生レポートをしてくれています。

そろそろまとめに入ります。私の考える中で、公民館の現代的役割ということについてお話ししながら終わりにしたいと思うのですが、特にコロナ以降、私自身が感じてきたことを踏まえて、公民館の現代的役割ということを考えてみたいのです。

繰り返しになりますが、人が集まることによって落ち着きと共感をつくる、これがやはり公民館の集会機能の根幹だと思います。人と話すと、みんなで本を読むということもいいかもしれませんが、先ほどの花壇づくりのように、命と触れ合うといった活動、あるいは市民の活動として好きなものに触れる。音楽でも合唱でも演劇でも美術でも、好きなものに触れること。それによって知識、関心が同じ仲間と共感の輪をつくっていく。それはオンライン疲れから私たちを解放してくれるのではないかなと思います。

最近の大学生向けのアンケートで、オンライン授業について聞くと、身体的に疲れると回答する学生が結構います。これは全世界的にも

言えることです。皆さんはオンライン会議とかオンラインで人と話すと、対面とは別の疲れを感じるのではないかと思います。それは目が疲れるとか肩凝りがするとか、それだけではなく、何かちょっとぐったりするというか、そういったことがあるのではないかなと。それは一体何なのかという研究が今、進められているところではありますが、対面とは違ったストレスを私たちに与えてくる。そこから解放してくれるのは、やっぱり対面で集うこの公民館という場所ではないかということです。

人間らしく生きていく、人間にしかできないことにみんなでチャレンジしていく場所だと。デジタル技術が進展していく中で、私たち人間が人間にしかできないことって一体何だろう。それは限られたことかもしれませんが、しかし機械には代替できない無限の可能性を私たち人間は持っていると思います。それは例えば人と出会うことであったりとか、本を読むこと、書いたり表明したり考えたり、お互いのことを気を遣い合う、私たちが人間だからこそ、生き物だからこそできることではないかなと思います。ですから、公民館というのはある意味、私たち人間が人間らしく生きていくために大切なこと、価値観を育てていく場所ではないかなと思うわけです。そのための権利を保障する空間が、先ほど学習権という言葉がありましたが、公民館ではないかなということです。

もうソーシャルディスタンスなんていう言葉はほとんど世の中から消えてしまいましたが、つながりというものの一方で、ディスタンスという言葉が一時期出てきました。岡田知弘さんという方がソーシャルディスタンスよりもフィジカルディスタンスなのだとおっしゃっています。コロナがひどかった時期の議論ですが、ソーシャルディスタンスという言葉で私たちは必要以上に人と人とのつながりを断ち切ってしまっていないかということです。それはつながりを切ってしまうという意味ではなく、物理的な距離さえ保

てば感染しないという意味で、フィジカルディスタンスさえ保って、私たちのつながりは維持していく。ソーシャルディスタンスという言葉は本当に適切だったのかということですが、コロナ以降、私たちは人と人との距離感みたいなものを新たに再考する時期に来ているのかなと思うのです。

感染症が流行するということでは、必要な対策をとる必要はありますが、一方で必要な対策さえとれば、私たちはやりたいことをやってもいいし、人生一度切りのわけですから、どんどんやるべきだと思っていますし、それができるのが公民館です。公共施設、公共空間の1つの特性としては、誰もがアクセスできる場所であるということです。このパブリックな空間が日本には少ないのではないかなというのが建築家の隈研吾さんの主張ですが、公民館はまさに誰でもアクセスできる地域の中の公共空間なわけで、その空間をこれからも守り育てていくのはとても大事なことはないかなと思います。

先ほど歴史を振り返ったときに見えてきたことですが、公民館は時代の中で常にどうあるべきかということを自問自答し続けてきました。これが公民館の戦後史でありますし、60回の蓄積ではないかなと思います。私たちもまさにその途上に、渦中にいるわけで、時代に対応し、そして時代をつくっていくために改革と挑戦を、これまでのようになお一層続けていくのが私たちのやるべき仕事ではないかなと思っています。

おわりに

何度も繰り返しになりますが、公民館というのは人と出会い、それからその場所に身を置いて経験を共有することで落ち着き、それから共感というものを育む空間ではないかということ。それから、時代の中で公民館というのは柔軟に形を変えてきたし、これからも恐らく変えていくであろうということです。

私は以前、「施設」という言葉の意味に注目して調べたことがありました。施設はハード由来、建物という意味として私たちは考えがちですが、『広辞苑』を引いてみると、建物のほかに事業とか活動という意味もあるのですね。戦前期ぐらいの社会教育の文献を読むと、そういう意味で施設という言葉が使われていることが多いのですが、施設というのは、歴史的にみると建物という意味だけではないのですね。建物と活動がセットになった言葉として「施設」という言葉は存在しています。そういう意味では、施設というものは建物だけでは成り立たない。建物と人の活動があって初めて施設であるし、特に公共施設というのはそうではないかなと思います。そういう意味で「建物と人をつくる」と書きました。

それから、日本の行政はしばしば箱物行政と言われがちです。私は以前、公共ホール、文化ホール、公会堂、そういった公民館よりももっと大規模な集会施設の歴史を調べたことがあります。最初、私は日本の箱物行政というものをちょっと批判してやろうと思って公会堂の歴史研究を始めたのですが、いつの間にか逆になってしましまして、箱物というのは面白いのではないかなという結論に至りました。多目的施設というのは、使い方によっては本当に面白い空間になる。例えばこのホールもそうだと思いますが、このような集会所もやれば、文化活動のスペースにもなりますし、子どもが集まる場所にもなります。箱物というのは使い方によってその地域の歴史を積み重ねていく拠点になり得る。そういう意味では、箱物行政は批判されますが、箱も使い方といいますか、そういう部分があるように思います。

公民館というのはいい意味で箱なわけですから、その箱に歴代の地域の人たち、職員の方々がいろいろな面白いものをどんどん詰め込んできたおもちゃ箱のような場所ではないか。

そこから取り出せる様々な宝がこの数十年の間に積み重なってきているように思います。

「個」ということに少し引きつけて考えてみますと、私たち1人1人が暮らしや文化を学んで楽しむことで、地域や社会がつくられ発展していくということがあろうかと思えます。個の活動、私たち1人1人の活動というのは当然、個人の関心に根差している。例えば私は音楽が好きで、仲間と音楽を演奏したり聴いたりしたいなという思いをずっと持っていますが、それは個人の楽しみを目指すものですけど、それが仲間であったり、私たちが生きているこの地域や社会とつながっていく面白さというものが、この集団的な活動の中にはあるように思えます。個人の関心に根差した個人の活動であっても、それは何らかの形で私たちが暮らしている現代の社会とつながっているわけで、その個の意識と地域や社会を何らかの形で結び合わせていくのが公民館という場所ではないかなと思います。

はじめの「公民館と社会教育のイメージ」ということに戻るのですが、イメージや前例というものに私たちはとられ過ぎないで、公民館というものは、これまでもこれから何でもあるべきだと私は思っています。その基本にあるのは、地域を見つめて1人1人の話を聞くことではないかなと思います。東京農工大におられた千野陽一先生は、若い頃に公民館の職員をやられていた方ですが、「社会教育を学ぶ若い人に何か一言、言うとしたら何でしょう」という問いを投げかけたときに、「人の話をよく聞くことです」とおっしゃったのですね。それが社会教育にとって一番大切なこと、とても大事なことだなと思います。そうか、目の前の1人1人の話を聞くことから社会教育というのは始まるなと。そう考えると、私は今回いただいたテーマの「個」ということの大切さが、そこから見えてくるようにも思えます。

集団活動を組織してつながりをつくっていくのが社会教育、公民館の役割とはいえ、やはり

1人1人の来館者であったり、地域の方の話をよく聞くとところから公民館の活動が始まっていく、社会教育を考えることが始まっていくので、やはり個というのがとても大事になっていくのではないかなと思います。

まとめるならば、公民館活動というのは個から始まって、公というものにつなげていく場所。1人で行くことも楽しいし、誰かと行くことも楽しいし、その双方を楽しむ場所ではないかな。個人と地域社会の結び目になるような、そんな結節点になる場所が公民館なのではないかなと私は考えております。

皆様の何か考えるきっかけにさせていただければ幸いです。ご清聴ありがとうございます。

質疑応答

【質問①】

国分寺市公民館審議会の田中と申します。新藤先生、今日はありがとうございました。とても分かりやすいお話で、丁寧に話していただいたと思います。今まで思っていなかったことも教えていただいたと思います。実は国分寺市におきましても、公民館運営審議会の話の中で、若い人たちにもっともっと公民館に入っていくにはどうしたらいいかということ、答申を考える中で、1つのテーマにしてきたという経緯もございます。

今日のお話の中でとても興味深かったのは、昭島市の公民館に先生のところの学生さんがいらっしゃって、調査しながら、学生目から見た公民館というのをまとめていただいたということがありました。改めて、いわゆる我々みたいな中高年とか、それから先生のような研究者とか、そういう目からではなく、学生のような若い人だからこそ特に何か特徴的に出た視点というのがあればご紹介いただければと思います。お話の中にいろいろあったと思うのですが、

特に多摩地域の公民館に対して、若い人たちからの視点として、こういう点が重要な点と感じられたというのがありましたら、ご紹介いただけるとありがたいのですがもし何かありましたらお願いしたいと思います。

【回答①】

ありがとうございます。とても難しいのですが、学生はこういうところを面白がってくれるのかというところの1つ1つがとても新鮮で、ある意味、公民館の全てが面白いというところなのですよね。公民館に関わっている期間が長い人たちにとっては当たり前になってしまっている集会機能であったり、趣味のサークルの人たちの集い・学ぶであったりとか、ロビーのチラシであったり、利用団体紹介の冊子であったり、ふだん、活動していると当たり前にある空間の全てが魅力的だということがあるので、ここはというのは特にはないのですよね。それは困ってしまう一方で、そうか、1つ1つ私たちが公民館の中で積み重ねてきたものを見直して、大事に磨き直していくことが公民館の魅力につながるのかなということを感じております。

多くの学生が言うのは、公民館というのはなかなか入りにくい。特に何のサークルにも入っていない、地域のことに接点がないという学生世代の、20代ぐらいの生活者にとっては、公民館の敷居が高いと。何か用事がないと入りにくいということをよく聞きますので、1人でも入りやすい、若い世代でも入りやすいというような、そういう敷居の低さみたいなものをもう少し公民館はつくれないだろうかということはよく聞きますね。例えば夜間の利用を何らか工夫するのかとか、ロビーとか庭の部分の使用をもうちょっと柔軟にしてみるとか、工夫したら、若い世代が公民館に入ってきてくれるようなきっかけづくりになるんじゃないかなということは感じています。しかし、総じて感じるのは、公民館の持っている性格の1つ1つがどれも新鮮だということです。

特に学生たちに響くのは、集う人たちの人の魅力みたいところがやはりありまして、建物、ハードウェアの可能性ももちろんなのですが、大学生世代にとっては、学ぶのが仕事であり当たり前の人たちですが、公民館に集う方々というのは、ある意味、学ぶとは何かという学びの原点みたいなものを突きつけてくれるような、そんな出会いのきっかけにもなっているようです。そういう知的好奇心であったり、生活課題に根差した、突き動かされて学ぶ人たちの姿みたいなものが、制度の中である意味守られてぬくぬくと学んでいる学生たちにとっては、ちょっとしたカルチャーショックのようです。それが若い世代にとっての公民館の魅力であり、衝撃やカルチャーショックを受けるような場所なのかなと思います。若い学生世代と人生の先輩世代をいい形でつないでいくと、お互いにとって刺激になるのかなと思います。

今回、昭島では公運審に学生に参加してもらってとてもよかったのですが、お互いにとってとてもいい刺激になりました。何らかの機会をつくって、学生世代と公民館の利用者をつなげていくようなことができればいいのかなと思っています。



質疑応答の様子

【質問②】

西東京市の市民のオダと申します。若い人が公民館をどう見ているのかは、とても気になることです。「公民館という名前がドンくさいよね」という話も聞くのですよね。確かに古くさい、ドンくさいかもしれないが、じゃあ、コミュニティセンターという名前に変えればいいのかとか、ほかの名前に変えればいいのかと、そういうことではないだろうなと思うのですが、若い人にとって公民館をパッと見たときに、先生のところの学生さんは先生のアドバイスがあるから、入っていった意欲を引き出すことができるのだけど、そうじゃない若い人なんかは、パッと見て公民館は入りにくいところという印象を持っているのだろうけど、じゃあ、名前なのか、何か違う要素があるのかということをしごく知りたいです。一般の若い人がどういうふうに見ているのかということをお教えいただきたいなと思います。

公民館としては、どこでも話題になっていますが、公民館がなくなって、ほかの施設に変わっていく。それはいろいろな自治体の事情もあるのですが、果たしてそれでいいのか、すごく疑問を持つのですね。若い人はそういうことを求めているのか、社会教育はどうなっていくのかとても心配なので、どういうふうに見られているのかなというのを伺いたいと思います。

【回答②】

どうもありがとうございます。一言で言うとほとんど知らないというのが学生の大半だと思います。教育学部の授業としてとってくれるというところで、既に関心の高い学生ではあるのですが、彼らに言わせても、公民館というのはこの授業をとるまで知らなかった、名前も知らなかった、地域で例えば児童館や学童、学校外で集まる場所、図書館や公園などを使ってはいたが、公民館に主体的に関わってきたという学生はほぼ皆無ですね。関心を持っている学生も含めて、大学になって初めて出会うということ

がほとんどです。それをどうしていったらいいのか。大学の場合で地道に社会教育は大事だ、大事だと言うしか私にはないのかもしれませんが。一言でお答えするならば、ほとんど知らないという状況です。

彼らが、じゃあ、公民館をどう見るかという、先ほど申し上げましたように、公民館のほぼ全てが新鮮だということです。施設もそうですし、集う人もそうですし、様々な制度、仕組みの全てが面白いということなのですね。

ちょっと斜に構えた学生からは、もうちょっとおしゃれな場所があるといいとか、スターバックスが入るといいんじゃないかという意見も出ますが、本当にそれでいいのかなども思うわけですね。施設設備の更新は定期的にやっていかないといけませんので、そのときにおしゃれなものも、10年20年たったらダサイ空間になってしまうかもしれませんし、表面上のおしゃれみたいなところは、私はあまり工夫する必要はないとは言いますが、本質的に重要な部分ではないように思います。もちろん入りやすい、ゆったり過ごせる空間、環境づくりというのは大事かもしれませんが、もっと大事なものは、そこで人が集まって仲間をつくって何らかの活動ができる場所、そういう意味では大学生のサークル活動の延長みたいなところもあると思うのです。自分自身も以前やっていましたが、例えば学生が大学を卒業した後に、自分のサークル活動の仲間と一緒に公民館を使ってもいいんじゃないかと思えますし、そういう形で、まずは気軽に使ってもらう。そういう中で自分たちの趣味の活動を深め、そして横のつながり、仲間を少しずつつくっていく、みたいなことができていくといいんじゃないかなと思います。

そういう意味では個人ののための学習スペースや貸しスタジオではなくて集団、地域社会、他者に目を開かれていくという意味で、私は公民館という名前は手放してはならないと思います。それから「個」を「公」につないでいくという

意味では、やっぱり専門職員の存在というのは不可欠で、それがただ単なる貸しスペースになってしまうと、民間の個人貸出のスペースとほとんど変わりがなくなってしまう。やっぱり個の興味・関心を公につないでいくという意味での公民館の役割、職員体制、それからこの空間というのは大事にしていく必要があるのかなと。

また、公民館の施設は、学生の人たちにとっては昭和レトロの空間にもなりつつあるようです。例えば喫茶室とか、視聴覚室にも、16ミリの映写機があったり、若い世代にはちょっと懐かしい場所。和室もそうですが、自分の家にはない、ちょっと懐かしい経験ができる空間、プチレトロな空間みたいな要素もあるみたいで、それはそれで学生たちに楽しんでもらえているような気がします。若い世代はそういうところを柔軟に活用しながら、面白いことをやってくれるんじゃないかなと私は見ております。

【質問③】

小金井市の公運審委員の稲垣と申します。今日は本当にどうもありがとうございました。いろいろ学ばせていただきました。「個」から「公」へというところで、今日、例えばこの本多公民館さんに初めて伺ったのですが、隣に図書館があったり、先ほど昭島では公民館と市民会館が併設されているような、そういう施設は結構多いと思うのですね。例えば図書館なんかは、いわゆる個が行く場所、公民館は公と考えた場合に、そこをうまく連携すれば、個から公へ展開することができるのかなという気が何となくしているのですね。

例えば公民館と図書館は、行政の中では担当する組織が違って、どうしても縦割りといえますか、別々で運営していくところがあります。うまく連携して広めていくというような例を、何かご存じでしたら教えていただきたいと思いました。よろしくお願いします。

【回答③】

ありがとうございます。私も不勉強で事例をご紹介することができずにはありますが、とても大事なことだと思います。特にこちらの国分寺さんは公民館と図書館が一体化しています。ですから、むしろ私が国分寺の皆さんにお尋ねしたいぐらいなのですが、個人の学習意欲に根差した図書館、それから集団活動を行う公民館というものが、どう連携していくのか。

いろいろ可能性はあると思うのです。何かあるトピックについて、みんなで学ぶ。公運審が絡んだ場合、今度はそれを図書館で調べてみるとか、そういうことはいろいろできると思うのです。昭島の場合になりますと、公民館と図書館が離れてしまっていることもあって、事例が思い浮かばないです。公民館と図書館に限らず、公民館と博物館とか、公民館と学校ももちろんですが、ほかの機関と、あるいは地域の大学や学校もそうですけど、ほかの機関と連携しながら、いろいろな事業、講座を組み立てていく。昭島でも地元企業であったり、地元の市民活動団体との連携、いろいろありますが、機関同士の連携みたいなものは、それぞれの施設が忙しくてつながりづらいという実態もあります。しかしそう言っていては活動の可能性は広がりませんので、もう少し横のつながりをつくりながら活動を進めていくというのはありかなと思いますし、そのほうがきっと個と個をつないでいくという意味でもダイナミックな活動ができるのではないかなと思います。

お答えにならなくて申し訳ないのですが、大事な視点ということで言わせていただきました。ありがとうございます。

**第60回東京都公民館研究大会
第一課題別集会**

**公民館だからできる世代を超え
人と人をつなぐ仕掛けや展開の
ある事業**

事例報告者 西東京市田無公民館分館長 山本 裕美子 さん

助 言 者 日本女子大学名誉教授/国分寺市公民館
運営審議会委員長/三鷹市生涯学習審議 田中 雅文 さん
会・社会教育委員会議会議長

【企画運営】東京都公民館連絡協議会 職員部会

西東京市田無公民館の実践報告

中学生と地域活動団体代表たちが各自関心のあるテーマで語り合う『SDGsロビーフェスタ田無』の成果と展望

【事例報告者】西東京市田無公民館分館長 山本 裕美子さん

1 普段気になっていても話せないでいたことを語り合えてよかったと話す地元中学生たち

「石神井川の清掃活動が雨で中止になったのは残念だったけど、それと同じくらいとても関心があったLGBTQ+について、いろいろと話し合うことができてとてもよかったし、とても楽しかった」「普段気になっていたけど誰ともそのことについて話したことはなかったから、こういう機会があって、いろいろ話し合うことができてよかった」と感想を述べ合っているのは、今年度からスタートした西東京市田無公民館の「夏の中学生ボランティア(SDGsサポーター編)」の振り返りの会での田無第四中学校の生徒たち。田無第一中学校生も2人参加していますが、ボランティア部のある田無第四中学校からは17人も参加がありました。

2 田無公民館初の「夏の中学生ボランティア事業(SDGs サポーター編)」のメニュー

・6月28日(水)16:10~18:00全員参加。
中学生ボランティア事前説明会・市内の石神井川と隣の東久留米市の落合川について事前学習会(講師は、石神井川の清掃活動をしている2団体の代表2人と、東久留米・川クラブ講師)

・7月1日(土)9:30~11:30石神井川のゴミ拾い(残念ながら雨天のため中止)

《事例報告者
山本裕美子さん》



・7月9日(日)9:00~SDGsロビーフェスタ田無(石神井川清掃雨天中止の代替の人は12:45まで。元々一日スタッフアシスタント希望者は15:30まで)

上記2つは両方かどちらかを必ず全員が選びます。

希望者はさらに、下記のどちらかも体験可。

・7月15日(土)午後、落合川で東久留米・川クラブの川塾に参加し魚採集観察と外来種駆除。

・7月16日(日)午前、田無公民館主催「親子で落合川を探検しよう!」中学生サポーター

・7月19日(水)16:10~18:00全員参加。

地域活動団体代表者たちと共に中学生ボランティアの感想シェアと防災学習(講師はジョージ防災研究所代表 小野修平さん)。西東京市公民館長発行のボランティア証明書の授与。アンケートの記入提出。ほとんどの中学生がまた機会があれば参加したいと回答。

3 2年目の「SDGs ロビーフェスタ田無」中学生ボランティアの参加で活発な発言の場に

「給食を残さないように配膳の時に少なめにとえるようにするところから食品ロスを減らす努力をする」「他の国は認めているのに、日本はまだ同性婚を認めてないのでLGBTQ+に対する意識が日本は遅れている」「女性の意見にあまり耳を傾けず男性の意見だと耳を傾ける風潮はおかしい。もっと女性の意見も尊重されるべき」「少子高齢化が進んでいて人口の割合が多い高齢者の声ばかりに日本の政治は耳を傾けているから、もっと子どもや若い人の意見にも耳を傾けてもらえるように、年代ごとに割合が同じになるよう、選挙で投票できる高齢者の人数をあらかじめ抽選で減らすとかあまりにも高齢で判断すること自体難しい人は運転免許みたいに投票権を自ら返納できるとかして、もっと若い人や子どもたちの意見も尊重してほしい」「川の生き物が元々好きなので、市民の人たちの活動や努力で汚れた川が清流を取り戻した落合川の自然観察会に参加するのをとても楽しみにしている」など、今年2年目の田無公民館「SDGsロビーフェスタ田無」では、市民とともに参加した中学生ボランティアたちもそれぞれ関心のあるテーマで活発な意見交換を行い、全員が意見を発表しました。

4 7月9日(日)に実施した第2回「SDGs ロビーフェスタ田無」の流れ

8:30~9:00ロビー会場設営、オンライン講師と接続確認。

9:00中学生ボランティア10人とテーブルトークホストを担う地域活動団体代表たちが田無公民館1階ロビーに集合。全員で自己紹介後、テーマごとのテーブルトークの受付を、事前に実際に中学生ボランティアがお互いに実践。

10:00「親子で折り紙ぺろぺろキャンディ作り」がスタート。講師役の田無公民館保育員たちから、中学生ボランティアたちも、折り紙ぺろぺろキャンディなどの作り方を教えてもらい、全員が熱心に折り紙に取り組んでいました。

10:30「語り合いから考えるSDGs」開始。

関心のあるテーマのテーブルで、気になる課題を語り合い、楽しく知り合いや仲間を増やす出会いの場。アドバイザーの浜松市富塚協働センター(10年前までは公民館)主任でコミュニティ担当の野嶋京登さんは、遠隔地のためオンラインZoomで大型テレビモニターにて参加。テーマごとのテーブルホストは地域活動団体代表や田無公民館専門員が担い、グループワークツール「えんたくん」を囲んで、一般参加の市民も中学生ボランティアたちも各自の関心のあるテーマのテーブルに座りスタート。

テーブルごとのテーマは、

- ①食品ロスを減らそう
- ②地域のつながりづくり～「繋がりたい」を「つなぐ」～
- ③ジェンダー平等やLGBTQ+
- ④石神井川に清流を取り戻す活動
- ⑤子育て世代への支援を考える
- ⑥体操で健康維持
- ⑦子育てあるある情報交換

まずは、全国でも先進的な事業にいくつも取り組んでいるアドバイザーの野嶋さんから、「みんな笑顔のまちづくり 実現への秘策～地域コミュニティの原点は、楽しい時間を共有すること～」と題し、いくつもの最新取組事例について、お話を伺いました。野嶋さんも常に、どの事業がSDGsのどの目標に関連した事業なのかを意識して取り組まれており、発表の場では必ず関連ゴールのマークを明記して資料作成や発表をされています。

各グループ内でグループワークツール「えんたくん」に各自氏名等を書き込んで、野嶋さんの話を聞きながら印象に残ったキーワードをどんどん書き込んでいきます。それをグループ内で発表し合い、その後、各テーブルのテーマで普段気になっていることや、自分でもできそうなことなど、全員が発言するように順番にどんどん語り合いを進めていき、グループ発表を行いました。テーブルごとの発表は、大人たちの発表に加えて、中学生ボランティアたちも全員、

各グループでの話をマイクで発表しました。それらを受けて、野嶋さんから全体の総括をお話いただき、午前の部は終了しました。会場を午後の部へ設営変換して、午後の部も参加する4人を残して中学生たちは解散となりました。

午後の部は、創作落語「SDGs落語」と知的障害者学級あめんぼ青年教室による「手話歌と中国体操と一緒に楽しもう」。4人の中学生たちは、受付や会場設営転換等を担いながら、一緒に「SDGs落語」と障害者学級生たちによる「手話歌と中国体操と一緒に楽しもう」を、一緒に手や体も動かしながら楽しみました。

終了後に感想を聞くと、「手話歌の歌詞に感動して涙目になったくらい良かった」「中国体操で体があたたかくなってきた」「あめんぼ青年教室の人たちと一緒に交流できてよかった。楽しかった。また機会があったら交流したい」など、こちらの予想以上の感動や体験をされていて、中学生ボランティアを企画してよかった、SDGsフェスタに同日ちょうど活動している「あめんぼ青年教室」に参加してもらってよかったと強く感じました。

5 中学生ボランティアの振り返りの会で、地域団体代表たちと共に、感想シェアと防災学習

SDGsロビーフェスタ田無のテーブルホストとなる地域団体代表者たちと事前打合せをした時に、今回は中学生ボランティアも参加することを伝え、「それはぜひ繋がりたい」「万一災害が起きた時に一番頼りになるのは地元に住んでいる中学生だからぜひ繋がりたい」「他の地区ではジョージ防災研究所代表の小野修平さんが避難所運営に関わっているからうらやましい。こちらの地区でも何か関わってもらえないか」など一気に盛り上がりました。

そこで、中学生ボランティアの最後に全員が参加する振り返りの会に、地域団体の代表者たちにも参加してもらい、SDGsロビーフェスタ田無などに参加した感想のシェアを一緒に行

い、続いてジョージ防災研究所代表の小野修平さんを講師に招いてのグループワーク中心の防災学習にも、一緒に参加してもらいました。

小野修平さんは、いきなり地域の高齢者たちに「災害時はあなたたち中学生が頼りよ」などと言われては、まだ子どもの中学生たちはドン引きしてしまうので、そうならないように配慮した講座展開をしてくださいました。

小野さん作成の災害時に実際に直面する事例から作ったカードを使っていくつの事例でグループワークを行い、さらに、素人がよく知らずに2時間以上も挟まれている人を助けようとしてかえって相手の命を危険にさらしてしまうクラッシュシンドロームというのがあることなども学びました。その後、自分たちの学校が避難所になったらこんな風になるというのを、他県の避難所になった学校の体育館の実際の様子の写真を大型スクリーンで見せて、避難所の最初の段階の様子、その後家族ごとに仕切りが設けられる様子、その後その中に簡易な段ボールベッドが設置されていく様子などを映し出して説明されました。

そしておもむろに会場の中学生たちに、「この段ボールベッドは誰が組み立ててくれると思う?」と質問しました。「市の職員の人」と中学生。「市の職員の方は飛び回っていてそこまで手が回らないんじゃないかな」と小野さん。「じゃあ学校の先生」と中学生。「学校の先生たちもものすごく忙しいと思うよ」と小野さん。小野さんは続けて「この段ボールベッドって、とても簡単に組み立てられるんだよ。ここにいる中学生たちでも十分に簡単に組み立てられるんだよ。だからその時は率先して手伝ってね」と話し、さりげなく避難所で中学生たちがお手伝いできること、役に立てることがあるんだよということを伝えてくださいました。この日のアンケートでは、「この防災講座で知らなかったことを知ることができた。とても役に立った」とほとんどの中学生が回答していました。

地域団体代表者たちは、「またこうした機会が設けられて中学生たちの思いもよらない発想や意見を聞かせてもらえることを楽しみにしているし頼もしく思う」「地域少年消防団というのはあるけど、地域防災少年団というのがあってもいいんじゃないか、1カ月か2カ月に1回こうして集まって学ぶ会があってもいいんじゃないかと思う」などとやや高揚ぎみに話されていました。

「SDGsロビーフェスタ田無」と「親子で落合川を探検しよう」と、中学生が活躍できる場づくりを目指した「中学生ボランティア」を掛け合わせた「中学生ボランティア(SDGsサポーター編)」は予想以上に実りあるものとなりました。今後も続いていくことを期待します。

6 田無公民館では、様々な事業をロビーで開催し「公民館事業の見える化」を図っています

田無公民館で、下記に示す事業の会場をロビーにしているのは、「公民館事業の見える化」が大きな狙いの1つです。

7月「月曜活動団体1日ロビー見学体験会」
「SDGsロビーフェスタ田無」「親子で田無公民館ロビーの壁に落合川の魚の写真の拡大コピーを貼って水族館を作ろう」

9月「火曜活動団体1日ロビー見学体験会」
「田無公民館利用者懇談会」

10月「水曜活動団体1日ロビー見学体験会」

11月「木曜活動団体1日ロビー見学体験会」

12月「金曜活動団体1日ロビー見学体験会」

1月「土曜活動団体1日ロビー見学体験会」

2月「日曜活動団体1日ロビー見学体験会」

3月「田無公民館ロビーまつり」「田無公民館利用者懇談会・団体連絡箱調整会」

ともすれば館内の1つの部屋の中だけでの、講座完結型になりやすい従来型の公民館の講座を、田無公民館では積極的に講座そのものの成果を発信すること及びロビーで事業を開催して「公民館事業の見える化」をすること

で、つながりを複合的、持続的に構築していくことに心を配り、工夫をしています。

様々な地点で目にする人々(田無公民館ロビー来館者や併設図書館来館者、近隣小学校3校中学校2校の取組展示を見に来る来館者、親子で制作した壁面水族館を見に来る来館者、公民館入口付近での事業の成果発表や、チラシ・ポスター、ホームページでの事業報告、事業について掲載された新聞記事やwebニュース記事、その記事を見て来館した人など)、関係者、興味のある人々へと発信して伝えています。

具体的には今回、地元中学生ボランティアの参画事業として、彼らが運営面での協働支援者としても、参加者としても、活躍の場を公民館が提供し、その環境整備をしながら、今後の事業の継続的な仲間として受け入れました。

また、担当する職員も参加した市民の皆さんも、学習がその場で終わるのではなく、学習から気付きが生まれ、その気付きが次の行動につながることで、行動は様々な人々との交流、つながりから、より大きな力となり、成果となっていくことを今回予感してもらえたようです。

近隣中学校の中学生ボランティアと公民館事業との結びつきを、従来型の講座応募参加者としなくて、事業運営パートナーとして中学生たちが活躍できる場として、また様々な世代の人々との出会いと協働作業の場として、私達公民館職員がサポートしていくことが、今後も重要であると思っています。

7 令和4年夏の3回講座「田無つながるプロジェクト」各講師からのエッセンスを融合して「SDGs ロビーフェスタ田無」を企画実施

その講座の内容を学んでいるのは講座参加者のみと思っている人が多いのではないのでしょうか。その講座の現場にいて最も多くのことを最も深く学んでいるのは、おそらく講座を企画

し運営している担当職員だと思います。

ですから、ぜひその学びから生まれた気付きを、次の行動につなげてください。その行動は、様々な人々との交流、つながりから、より大きな力となり、成果となっていきます。

実際に、令和4年夏の3回講座「田無つながるプロジェクト」の各講師のエッセンスを融合して「SDGsロビーフェスタ田無」という企画を生み出し、その年度末の3月に実施しました。

「田無つながるプロジェクト」オンラインゲスト講師の柏まちなかカレッジ学長・山下洋輔さんから、「身近なところにすごい人がいる。場所の確保も不要な2~3人の少人数ずつでいいから対話の文化を築きましょう。目標は、対話が当たり前前の街になり、柏まちなかカレッジが必要なくなり消滅すること」と、大人数集めないと、場所を確保しないと何もできない、始められないと思っている多くの人たちへ、思い込みをひっくり返す衝撃的な言葉がありました。ゆるく始めてゆるく続けばいいですよと、背中を押していただきました。さらに前年の他の公民館の講座参加者からグループ内で関心事は人様々なのにグループで1つのテーマに絞るのに時間がかかり苦労したとの話には、それぞれが好きなテーマで話をすればよくて1つに絞らなくていい、それぞれのテーマで2人ずつ語り合うくらいでもいいのですとのことでした。

オンラインゲストの杉並区の伊藤さんからも、「人と人が会話し何かが生まれれば良い。また会いたいねと思えるような終わり方をモットーに!」とのお話がありました。

オンラインゲストのすぎなみ大人塾連の朝枝晴美さんからは、「変(変わっている、変化)を大事に。つながりたい時にはつながり、つながるのが辛い時には手を放してもよい」とのお話もありました。

会場講師の齋藤尚久さん(杉並区社会教育主事、立正大学非常勤講師、社会教育士)からは、「経験体験や歩みを続けていくには、

『あいうえおのソース』が入っている学習でないといけない。あかるい・いい加減な(=ちょうどいい加減)・うれしい・えがお(笑顔)の・おもしろい」とお話がありました。

3回とも会場講師のコーディネータ・日本女子大学講師の小笠原東生さんからは、「SDGs(持続可能な社会への開発目標)。持続不可能を可能にするために学びがあります。公民館で学んで気づき行動につなげます。各自の多種類のライフステージでの3つの財産は①価値あるスキルの生涯学習とプラスになる人間関係の維持②活力の維持(運動・食生活・ストレス解消)と楽しい時間を過ごす仲間③変身する力、多様性・世代間を超えた仲間との交流」とのこと。

こうした「田無つながるプロジェクト」の各講師のエッセンスを融合して「SDGsロビーフェスタ田無」自分が関心のあるテーマのテーブルでSDGsを語り合おうという企画を生み出し、設定した8つのテーマごとに地域団体の代表や田無公民館専門員にそのテーブルホストを担ってもらい、その年度末3月に実施しました。

アドバイザーとして参加いただいた、田無つながるプロジェクトのオンライン講師も務めてくださった静岡県浜松市富塚協働センター主任コミュニティ担当の野嶋京登さんの数ある先進的な取組の中でも、多くの若者を巻き込む事業展開に幅広く取り組まれているので、事前打合せの時に、どうしてそういうことが可能なのか聞いてみました。

野嶋さんが着任された当初はどこの公民館とも同様の高齢者の方たちばかりが集う施設だったそうです。

そこでご自身がコミュニティ担当なので、コミュニティアシスタント制度を取り入れたそうです。中学生ボランティアを募りイベントなどのお手伝いをしてもらい、卒業後もコミュニティアシスタントとして活動してもよいなら登録をと、中学卒業の時にコミュニティアシスタントに登録

してもらおうそうです。

すると高校生になってもコミュニティアシスタントとして公民館（協働センター）に来てくれてイベントの手伝いから、高校生たちで音楽祭のイベント企画までしたり、手が足りない自治会の子ども会のお手伝いに行ったり大活躍なのだそうです。

田無公民館でも利用者の大半は高齢の方です。若者たちも集まる公民館にするには、ぜひ野嶋さんの考案したコミュニティアシスタントに近い仕組みをつくれなかと考えていました。

そこで、第2回目の今年7月の「SDGsロビーフェスタ田無」では、中学生ボランティアを事前に募集し活躍してもらおう、その先もつながっていけるようにしようと、「中学生ボランティア（SDGsサポーター編）」を企画し実施しました。

全国的に先進的な取組をされている方をご紹介くださった全国公民館連合会事務局次長の村上英己さんにたいへん感謝しています。また杉並の地域活動をされている方々につないでくださった齋藤先生、すべての方を引き合わせてくださったコーディネーターでもある小笠原先生、どうもありがとうございました。

8 公民館の存在意義を感じてもらえる事業を

この実践報告をお聞きくださった公民館職員の方へのメッセージです。

全国的に公民館の施設数は減少傾向にあり、首長部局への移管も可能となっている状況の中、これからも公民館が存続していけるように、これは公民館でなければできない事業ですとねと感じてもらえる事業を1つでも多く実施していくこと、公民館の存在意義を感じてもらえる事業を展開していくことがとても重要になってきます。

今ご自身が企画しようとしている講座は、

●館内の1つの部屋の中だけでの、講座完結型になりやすい従来型の公民館の講座になっていませんか？

●部屋にいる講座応募者と講師だけの講座になっていませんか？

●講座をサポートする前年度受講者や公民館利用団体メンバーや中学生サポーターたちはいますか？

●そういう人たちを育てていますか？

●あるいは参加者同士が交流できる講座になっていますか？

●交流を深めてサークル化できそうな仕掛けやフォローなどはありますか？

●他の主管課、高齢者支援課や環境保全課や危機管理室(防災)や男女平等センターや協働コミュニティ課や児童館などが企画している講座とそれほど変わらない似たり寄ったりの講座になっていませんか？

●地域とのつながりや地域の大人たちとのつながりや広がりや展開のある事業内容になっていますか？

●その講座の内容を学んでいるのは講座参加者のみと思っていませんか？

その講座の現場にいて最も多くのことを最も深く学んでいるのは、講座を企画し運営している担当職員です。ぜひその学びから生まれた気づきを、次の行動につなげてください。その行動は、様々な人々との交流、つながりから、より大きな力となり、成果となっていくに違いありません。

西東京市田無公民館では、近隣中学校の中学生ボランティアと公民館事業との結びつきを、従来型の講座応募参加者としなくて、事業運営パートナーとして中学生たちが活躍できる場として、また様々な世代の人々との出会いと協働作業の場として、私達公民館職員がサポートしていくことが、今後も重要であると思っています。

今回お伝えした西東京市田無公民館の事業展開が、皆様の今後の公民館事業の企画運営の一助または何かのヒントにつながればうれしいです。

西東京市田無公民館の山本裕美子さんの事例報告から見てくるもの

【助言者】日本女子大学名誉教授 田中 雅文さん

1 事例報告を聞くときのポイントについて

この後の事例報告を聞くときのポイントとして、①人と人同士を繋いだ工夫点 ②中学生の満足度が高い理由 ③大人たちが中学生から学んだこと、以上の3点に注目して聞いてみてください。

2 グループワークでの話し合いのポイントについて

山本さんの事例報告では、①の人と人を繋いだ工夫点については、価値と行動の共有がポイントだったと思います。②の中学生の満足度が高い理由は、対象者のニーズをうまく捉えていて、公民館でしかできないという独自性も良かったと思います。③の大人が中学生から学んだことについては、特に報告の中にはありませんでしたが、みなさん各々で想像してみて、今後に繋げてみてください。この後のグループワークでは、『公民館の持つポテンシャルや可能性について』『公民館に集まる人が互いに個性を発揮できる、お互い学びがあるwin-winの関係がどう達成できるか』の2点に着目して話し合ってみてください。

《助言者
田中雅文さん》



3 各班のグループワーク発表を受けて

皆さんの発表を聞いて3つほど大事だなと思ったことを最後にお話します。

まずは公民館の見える化、見せる化です。地域に公民館があるということをまだかなりの方が知りません。公民館の存在が市民にとって当たり前のようになっていくこと。そのためにはやはりアピールする、徹底して工夫し、情報発信していくことが大事です。2つ目は、出張公民館

のような公民館の外で行う事業です。公民館が持っている貴重な資源である人や組織のつながりを活かして、公民館の中での事業にこだわらず外で行う事業というものも考えていくといいと思います。そして、公民館の持つ貴重な資源を皆さんで再確認し、活かしていくという事が大事です。最後は子ども・若者の参画です。そこで楽しんで企画し、何か実現すれば自己有用感が高まっていく。子ども・若者がどうやって公民館を利用して事業を考えてくれるか、子ども・若者に何をやってもらえるのか、ということを考えていくというのが大事です。参画という言葉をさらに深掘りしながら、あり方をみんなで考えていければいいと思います。

《グループワーク
の様子》



グループ発表

グループごとに「えんたくん」を用いて、1.山本さんの実践事例のキーワードと気づき、2.実践報告から事業を企画する上でどういうヒントが得られたか、3.事業を企画する上でどういうことが大事だと思うか、4.「世代を超え人と人をつなぐ仕掛けや展開のある事業」について話し合い、主に4について発表しました。

【第1グループ】

公民館は「楽しい」を共有できる場、作品展示で「公民館の見える化」、中学校ボランティア部との連携のような新しいことに取り組む視点が大事だと思います。参加者全員が本音を話せる場づくりによりまた参加したいという好循環が生まれると思います。

【第2グループ】

一方通行でなく、参加型の行き交う学び、「教える、教わる講座」でなく「つなげる、つながる講座」が望ましく、シリーズ化により、同じ人たちが集まり、共に活動し、話しあうことでつながりと信頼関係が生まれ、更に発展した活動につながると思いました。

【第3グループ】

学校ではなく公民館だからこそできること、例えば、漫画やイラストなど学校教育では学べないような講座、ボードゲームなど子どもが大人に教える講座、調理室を使った異文化交流事業(外国人と日本人が互いの国の料理を教え合う)などを考えました。

【第4グループ】

企画実行委員は大人が担うという既成概念に捉われず小中学生が担う、出入り自由の“ゆるい”事業を行う、持続性・社会性のあるテーマの事業を展開する、公民館の安心・安全性の維持により多世代が集まれるようにすることが大事だと思いました。



《えんたくんを見せながらの
各グループの発表の様子》

【第5グループ】

多世代交流、継続性を視野に入れ、子どもから高齢者が一緒に参加できる「eスポーツ講座」を想定し、単発でなく複数回実施、公民館での「eスポーツ大会」を参加者が企画、小中学校や高校にチラシを配布、SNSを使った事業展開を行うことを考えました。

【第6グループ】

中学生が関われる場を実感できること、卒業してもアシスタント制度などでつながっていくことが大切で、大人になってからの学びにも

つながると思います。対話を少人数からでも始めること、楽しくて明るいことが大事だと思います。一日体験会で公民館の見える化ができると思います。

【第7グループ】

利用者を待つだけでなく発信すること、誰に向けた講座か意識すること、掲示物で知識が得られる場、活動する中高生からアイデアを得ること、参加者の時間の流れが一緒になる共有体験、利用者とのやり取りで地域を知ることが大切だと思いました。

【第8グループ】

(実際の事例を発表)小平市の年間の講座企画を作る市民による企画委員会は徐々に児童・生徒も増えてきており、市民の考えの象徴になっていると思います。国分寺市の小学校が早上がりの日に公民館でおやつを食べ、宿題を高齢者に教わる講座は、親も含めて多世代がwin-winになれると思います。

【第9グループ】

テーマを選べること、好きを起点に学びが進むこと、普段話せないことを存分に語れる時間や場、職員だけでなく多様な視点での事業企画、大人と中学生が対等に学び合える環境、講座で終わらずつながり続けることを意識することが大事だと思いました。



《参加者集合写真》

第60回東京都公民館研究大会
第二課題別集会

東京都公民館連絡協議会の
未来を考えるあり方検討会の
中間報告

事例報告者	東京都公民館連絡協議会顧問 調査・研究班メンバー	伊東 静一 さん
司 会 者	東京都公民館連絡協議会顧問 調査・研究班メンバー	岩松 真紀 さん
助 言 者	東京都教育委員会生涯学習部 主任社会教育主事	梶野 光信 さん

【企画運営】東京都公民館連絡協議会 調査・研究班

東京都公民館連絡協議会の未来を考える

あり方検討会の中間報告

【事例報告者】都公連調査・研究班 伊東 静一さん

I 事例報告

事例報告に入る前に、司会者から本日の進め方の案内と、本日助言者をお願いしていた梶野さんが体調不良のため参加できないことのお詫びと、本人から送られてきた資料の紹介を行いました。

(1) 都公連の設立と成果

今回は、都公連の発足から過去4回のあり方検討会の取組み事例、そして今回の進捗状況を説明しました。

まず、都公連が1951年に発足した背景ですが、前年6月、小金井市浴恩館（現小金井市文化財センター）で開催された「全国公民館職員講習会」で、満場一致で全国公民館連合会結成となり、都道府県ごとの公民館連絡会組織を作ることになりました。

都公連発足当初の規約では、「社会教育振興に関し、実践的な活動を推進し、公民館相互の親密な連絡を図り、公民館活動の発展と普及に寄与することを目的とする」としていました。

都公連としての大きな成果として、1962年以降毎年研究大会を実施し、職員の交流・研修の機会、公民館相互の連帯を高め、また、公民館で学ぶ住民相互の学習成果の交流、連帯の広場としての役割を果たしてきました。

もう一つの大きな成果として、1974年に「新しい公民館像をめざして（通称：三多摩テーゼ）」が東京都教育庁から発刊されています

が、この作成に都公連加盟の職員が多数関与したことが判明しています。

その成果を、日本中の公民館づくり運動や運営に反映しています。

さらに、1981年に発行している都公連30年誌の発行では、2年間に21回の編纂会議を行いました。40年記念では、都公連加盟の公民館での活動の記録映画を作成しDVDで保存・配布し、50年誌では、都公連の草創期を担った元職員のインタビュー記事、公民館づくり運動の歴史などをDVDに集約し、冊子とともに配布しました。

(2) 過去4回のあり方検討会の成果

最初のあり方検討会は1974～75年に5回開催され、3部会制や役員体制の強化等を行いました。2回目は1995年に9回開催され、財政強化および公民館大会等について検討されました。3回目は1996年に7回ほど開催され、研究大会開催要綱の新設や規約の一部改正がされました。4回目は2010年に8回開催され、研究大会の開催及び各自治体の分担金について検討されました。また、この段階で退会する自治体が増えてきたため、新たに加盟を模索する取組みなども検討しています。

(3) 現在進行中の検討会の報告

現在「東京都公民館連絡協議会の組織等検討委員会」が設置され、以下の4点で検討されています。

①都公連の組織及び運営に関すること。

②都公連の事業に関すること。

③都公連の円滑な運営に必要な事項に関すること。

④その他答申を検討するに当たって必要な事項に関すること。

これまでの議論では、都公連加盟自治体が減少する中で、都公連会長市の事務量の負担軽減、大会を運営する自治体職員の負担軽減の方法、現在の三部会（館長・委員・職員）制や開催回数の検討などの意見が出されています。そして、3月中には、都公連会長に答申という形で報告が予定されています。



2 東京都教育庁の動向

梶野さんから送られてきた資料には、主な内容として以下のとおりありました。

(1) 東京都内公民館関係者との近年のやりとり

都公連加盟市の状況（加盟市の減）について情報提供を受けた。都内公民館及び都公連館長部会からの依頼により研修を実施した。

(2) 東京都教育庁と都公連との関係性

平成12年度末に都立多摩社会教育会館事業係廃止以降、研究大会の後援名義を出すこと、生涯学習課職員が大会時に御挨拶に伺う程度となった。

(3) 社会教育行政をめぐる動き

①社会教育行政の一般行政化の動向

「出雲市：2001年度社会教育関係事務の一部を市長部局に補助執行、2002年公民館をコミュニティセンターに」

「千代田区：2002年度から社会教育関連業務を区長部局に補助執行」

②教育委員会縮小論

「穂坂邦夫（元志木市長）：『公民館と市民施設の活動が同じようだとその存在意義があまりない』」

③社会教育施設の市民施設化（公民館の名称変更と移管）

「北九州市市民センター：2005年1月に公民館が市長部局に移管」

「大田区文化センター：2000年4月に教育委員会から首長部局の特別出張所に移管」

④社会教育施設の委託化・指定管理者制度

「指定管理者制度の導入：文部科学省『平成30年度社会教育調査』によれば、社会教育施設における指定管理者制度の導入状況は、公民館9.2%、公民館類似施設24.5%」

(4) 民営化路線の考え方で進む行政改革、その下での公民館は？

社会教育行政（特に社会教育施設）は民営化論を基調に論じられていることがわかる。実際、東京都の社会教育施設についても、施設の廃止（生涯学習センター、高尾自然科学博物館等）、青年の家の廃止（→PFI制度の導入（ユースプラザ）をはじめとした民営化論を中心に展開してきた。

文化施設は、石原都政（当時）が掲げた「文化行政の一元化」施策により、2001年度末で、教育庁が所管していた4施設（東京都美術館、東京文化会館等）は、生活文化局に所管替えをした上で、財団法人東京都歴史文化財団（当時）に管理運営を委託し、その後、指定管理者制度に移行。

その政策動向の流れの中で、公民館の将来像が問われているのが現状。

(5) 人口減少社会の元でダウンサイジングの行政経営が不可避に

本格的な人口減少社会の到来で、行政のダウンサイジングが不可避となってきた（縮小社会）。それに伴い、1970年代から使ってきた公共施設を統廃合する動きが進んでいる（埼玉県北本市の例：『人口減少が進む自治体で、1970年代から使ってきた公共施設を統廃合する動きが進んでいる。老朽化したり、使う人がいなくなったりした公民館、福祉施設などを閉鎖し、1ヶ所に集める街のコンパクト計画だ。埼玉県内で老朽化施設の割合が比較的高いとされる北本市のケースから「縮小社会」と向き合う自治体の動きを見た。・・・』（朝日新聞デジタル 令和6年1月18日配信記事参照））
 (6) 北本市の例は他人事ではない→議論の前提をどう設定するか

「都公連の未来を考えるあり方検討会」の議論の前提に加えて欲しい視点

①人口減少社会の下での公民館の展望をどう描くか

現行で1館体制の自治体、複数館体制の自治体で考え方は異なるが、施設の老朽化の問題を視野に入れているか？公共施設の統廃合（複合化論）の中でのサバイバル戦略をどう描くか？

②都公連の役割というか、都の公民館関係者の連携の場がどのような枠組みだと設定できるのか

昨年11月の都公連館長部会の提案に私が賛同し、協力を申し出たのは、都公連をどう守るかという発想ではなく、26市の連携・問題意識の共有の場が必要だという姿勢だったからである。どのようにしたら都公連を守るか、組織維持を図るかという枠組みを超えた議論枠組みの設定が必要だと考える。

(7) 東京都として、できることは何か？

東京都の社会教育部門の役割は、この20年の間で大きく変貌した。

・都立高校「自立支援チーム」派遣事業をはじめ、教育行政の中では重要な位置を占め

るようになった（いまでは生涯学習課不要論は完全に払しょくできた）

・社会教育主事の補充もこの3年間で4人確保できた。（うち、令和6年度には定数を1増することができた。）

・一方、区市町村の社会教育部門との連携の機会は殆どなくなっている。加えて、社会教育施設の指定管理者制度の導入等により、行政職員研修に参加しない（させない）区市町村も出てきた

①職員研修の支援という観点からは、検討可能な余地はある。但し、どのような枠組みで行うか、検討が必要

②26市として声をあげてくれた方が「求めに応じた」対応がしやすい

③（個人的な質問ですが）都市社連携との連携という観点を盛り込むことはできないのか？

(8) 社会教育行政に、社会教育主事として31年在籍した経験から思うこと

『「守る」という発想に立った時点で、すでに「敗北」が決定づけられてしまいます。このような状況だからこそ、「いかに攻めるか」という視点から都公連のあり方を考えていく必要があると思います』

3 グループディスカッション

ここまでの発表を受けて、グループワーク（5グループ）を行い、「都公連に何を求めている（いた）か」、「より具体的にどうしたらよいか」等、様々な視点から討議を行った。

1グループ

○職員や研究大会のスリム化は無理

○変化の違いが見えなかった

○集まることが負担。ZOOMをやっても環境整備ができていない。

○公民館ではなくコミュニティで

○都公連は仕事の整理を

○部会が何をしているか知られていない。その部分の話し合いが必要
 ○東京都が変わりつつある。バックアップ、体制の再検討を
 ○社教委の会議、都公連だけこうなったのはなぜなのか
 ○それぞれの公民館、自分の仕事でいっぱい。都公連に出る価値が感じられない。価値をどう高められるか

2グループ

○杉並区では公民館があったが、区民センター化して以降、区民の声が反映できなくなった
 ○都公連の情報が出てこない。何をやっているのかわからない。透明性がない。関ブロの経験も共有されない
 ○職員の在籍年数が少なく、ダウングレードが多い。職員の質の問題
 ○都公連自体ではなく、公民館で活動する市民への働きかけをする。それが本筋、正道ではないか
 ○図書館協議会は26市全市にある。まずは市民を動かすこと
 ○もっと都公連としての理念を打ち出すこと。それがないと難しいだろう。「メリット」とか「デメリット」とか、そういう話ではない



3グループ

○都公連に参加する魅力を感じなかった。研究大会での学びも面白くなかった。
 ○天秤にかけた時に職場での負担感、デメリットが多い。研修があっても実務につながっているかといえば、つながっていない。それらを踏まえて、障がい者青年学級の部会だと本音でざっくばらんに話し合ったことで課題に向き合えた。縦割りの部会のありがたさを感じた
 ○過去からのしがらみ、部会の開き方などが古い。「今までやっていたのだから」というような負担を軽減できれば。職員、委員が話せる場があることは社会教育の場として重要だろう
 ○部会の数ではなく、テーマ別の情報交換などができれば
 ○グループワークの際、お菓子を配っていただいていた場が和んだ。このように、堅苦しくなく、フレキシブルにやるべき
 ○専門家との交流も含め、自分たちの現実を知る交流が必要
 ○公民館が大好きである。他の現場とは異なる。理想論だが、ただ縮小するだけではなく、公民館によって人生が変わる人をどれだけ多く出せるか



4グループ

○都公連はどうあるべきか。総じて言うと、公民館にこだわらず、社会教育関係者が集う場としてあるべき

○東京都全体の社会教育関係者が関わるようにするには、東京都との連携が大事

○いろいろな「負担」という声を聞いた時に、「都公連って必要なのか」「もうやめちゃえばいい」と思うことがあるが、改めてグループで話し合いをしてみると、やっぱりみんな話がしたいんだ、交流する場を求めているんだと感じた

5グループ

○近年、職員のモチベーションが下がっている。社会教育だけでなく、行政全体として。職員の知識も含めて

○行政の計画に社会教育が載っていない

○図書館や博物館、地域のNPOなどとの繋がり、連携が必要。特に若者の支援について

○都公連とNPOの繋がりはあるといい

○事業として、都公連で憲法の学習会をやってほしい。いろいろな事情はあるが、我々の暮らしは憲法がよりどころ。これをやらないのはマイナス

○もう一度組織を見直す。立て直すためにぜひ実行してほしい



4 まとめ

現代は少子高齢人口減少社会と呼ばれ、多くの地方自治体でダウンサイジングの行政経営が不可避の方向に進んでいる。この流れは変えようがない。そして、自治体ごとに公共施設再編計画が進められ、公民館に限らず公共施設は面積の減少や廃止といった事例が見られている。

このような状況の中で開催された今回の課題別集会。都公連あり方検討会の中間報告を聞いてからのグループワークの中で語り合われた内容の中に、職場での負担感、職員としてのグレードが下がっているといった指摘や、都公連に加盟していてもメリットを感じられない、研修があっても実務につながっていないといった、指摘があった。

他方、都公連の問題より公民館で活動する市民への働きかけをするのが本筋、大勢の人との交流の場が必要という声や、研修に参加しざっくばらんに話し合えたことで課題に向き合うことができた、といった声もあった。

地方自治体が設置した公民館には、住民の学習環境の整備と求めに応じて学習支援する役割があるが、今日的な状況下では職員集団として十分検討し対応できる力量が低下しているとの指摘もあり、根本的な解決策が求められている。

今回の取組みの中でも、公民館だけで解決を目指すよりも、例えば東京都やNPO法人なども含む多様な団体との協働の取組みやつながりが必要ではないかとの意見もあった。

都公連研究大会での取組みとして行ったが、本来は各公民館で利用者とともにこれからの公民館のあり方を検討し、その報告をしあう場としての都公連研究大会としてはどうだろうか。

第60回東京都公民館研究大会 第三課題別集会

多様な人がつどい、 学びあう公民館への挑戦

事例報告者	リカバリーの学校@くにたち／ 一般社団法人眞山舎代表理事	土屋 一登	さん
事例報告者	中高生の学習支援「LABO☆くにスタ」／ しょうがいしゃ青年教室スタッフ	山本 貫人	さん
事例報告者	NHK学園高等学校・校内居場所カフェ 「よりみち」コーディネーター	鹿野 諒太	さん
助言者（コー ディネーター）	セッサ CESAくにたち事務局長／ 元国立市社会教育委員・元公運審委員	間瀬 英一郎	さん

【企画運営】東京都公民館連絡協議会 委員部会

Ⅰ 企画の趣旨

第三課題別集会は、国立市公民館地下ホールを会場に、運営関係者を含め約80名の参加を得て開催されました。

企画をした都公連委員部会では、近年、公民館の未来に対する危機感が共有されてきました。都公連の加盟市が減少しているなか、公民館の価値がもっと社会的に共有されていくためにどうしたらよいのか、準備過程で議論を重ねながら、課題別集会の企画の視点として、これまで公民館を利用していない人、特に地域の未来を担う子ども・若者はじめ、障害者などのマイノリティへのアプローチに焦点を当てた事例を選定し、それを聴いた参加者がしっかり議論できる時間をもつことを、今回の企画の柱にしました。



全体進行の西原副部長（西東京市公運審）

公民館は本来、利用者や参加者を限定せず、多様な人々が集まることができる地域の社会教育施設です。しかし、一般的に公民館は、子ども・若者や障害者などの利用が少なく、公民館からの積極的なアプローチが課題になってきました。本課題別集会では、国立市の取り組

みから、「多様な人」がつどい、交流し、学びあう公民館のあり方について考えました。

全体進行は、委員部会の西原みどり副部長（西東京市公運審委員）、会場の国立市公民館から冒頭の挨拶は清水周館長、企画趣旨の説明は井口啓太郎館長補佐が行いました。



挨拶する清水館長（国立市公民館）

コーディネーター（助言者）をお願いした間瀬英一郎さん（CESAくにたち事務局長／元国立市社会教育委員・元公運審委員）は、一橋大学卒業後、国立市の多様な資源を活用した新事業の創出による地域活性化を目的として、プロジェクトの立ち上げやコミュニティビジネスなどの創業支援機関「CESAくにたち」を有志と設立し、事務局長に就任。人と人をつなぎ、公民館や社会教育に関わる学習活動や市民活動の活性化にも尽力されてきた方です。今回の第三課題別集会では、「多様な人がつどい、学びあう公民館への挑戦」に即した「課題提起」をしていただき、プログラムのファシリテーションをしてくださいました。

今回は、委員部会の事務局を担当した国立市公民館に関わる事例の発表を3名の方をお願いしました。今回の事例発表者は全員20～30歳代で、「多様な人をつなぎ、学びを支える」

取り組みをされて方々です。一人目は、障害や生きづらさのある人が地域で幸せを感じながら暮らすための「リカバリー」と学びの場を創設された土屋一登さん（リカバリーの学校@くにたち／一般社団法人眞山舎（さなやま）代表理事）。二人目は、中学生の頃から公民館の活動に参加。現在は複数の場で大学生スタッフの中心的存在として活躍されている山本貫人さん（中高生の学習支援「LABO☆くにスタ」／しょうがいしゃ青年教室スタッフ）。三人目は、本業の傍ら国立市の市民活動に参画。通信制高校の居場所カフェでは場づくりや人をつなぐ役割を担われている鹿野諒太さん（NHK学園高等学校・校内居場所カフェ「よりみち」コーディネーター）。



趣旨説明する井口館長補佐（国立市公民館）

2 課題提起；間瀬英一郎さんのお話

最初に、今回の第三課題別集会でのテーマの確認と課題提起の説明が行われ、この集会で、課題解決につながる取り組み（＝グッドプラクティス）、具体的には国立市公民館の3つの事例を共有していこうという投げかけで始まりました。



課題提起する間瀬英一郎さん（CESAくにたち事務局長／元国立市社会教育委員・元公運審委員）※左

そして、集会は次の4つのステップ、①3つの事例紹介を聴く、②パネルディスカッションでの3つの事例の苦労や工夫を知る、③グループトークで参加者それぞれのグッドプラクティスを共有し合う、最後に、④参加者から出たグッドプラクティスの数例を全体で共有する、この流れで進められます。

また、グループトークでの、対話の場づくりにコミュニケーションツール「えんたくん」を使うことにも触れていました。

国立市公民館のグッドプラクティス（3つの事例）

めざす姿 = 多様な人がつどい、交流し、学びあう公民館

障害者・生きづらさを抱える人	➡ ① リカバリーの学校@くにたち
子ども・若者（中高・大学生）	➡ ② LABO☆くにスタ
多世代・多様な背景を持つ人	➡ ③ 校内居場所カフェ「よりみち」

多様性の確保には「風とおし」が有効!?

風とおしのよい公民館 = 風を内に取り入れ、中で循環させ、外に送り出す

風をいれる 民間・地域活動を公民館に取り入れる	➡ ① リカバリーの学校@くにたち
風をまわす 学びや活動の輪をつなげて循環させる	➡ ② LABO☆くにスタ
風をおくる 公民館から民間・地域活動へ送り出す	➡ ③ 校内居場所カフェ「よりみち」

3つの事例の位置づけ（間瀬資料より）

3 事例①;土屋一登さんのお話

土屋さんは、「幸せを感じられる国立をつくらう」という想いを大切に、障害や生きづらさのある人が、地域で幸せを感じながら安心して暮らすための「リカバリー」と学びの場を仲間と共に創ってきました。

人と人、団体が混ざり合いながら色々な対話を通して学びの輪を広げ、サッカーや音楽等の非言語的な対話と言語的な対話のバランスをとることの大切さや難しさを共有し合い、外の空気を入れるだけではなく、外の団体にも公民館の空気が入るような「空気の循環」を考える取り組みをされてきました。直接的な声掛けから始め、チラシやメール、連携団体との繋がりを大事にし、「楽しいものを創れる魅力あふれる空間」としての「風とおしのよい公民館活動」を、これからも目指していきたいと語られました。



土屋一登さん(リカバリーの学校@くにたち
／一般社団法人真山舎代表理事)

4 事例②;山本貫人さんのお話

「LABO☆くにスタ」とは、中高生向けの学習支援を第3の居場所として、毎月3回・水曜日に活動をしています。中高生の学習ニーズに対し、地域の学生が対応しています。

親や教師の縦の関係でもなく、また、友達の横の関係でもない、一歩先に行く先輩というナナメの関係です。「しょうがいしゃ青年教室」とは、企画運営を公民館職員とボランティアで行っています。

山本さんはLABO学習者から支援者となり、また、LABOから「しょうがいしゃ青年教室」へと活動の幅を広げています。公民館内で「学びや活動の風がまわっている」といえます。



山本貫人さん(中高生の学習支援「LABO☆くにスタ」／しょうがいしゃ青年教室スタッフ)

5 事例③;鹿野諒太さんのお話

校内居場所カフェ「よりみち」実施にあたっては、以前からNHK学園高等学校が国立市公民館と連携して、「地域で子どもの育ちを支える」ための講座や企画を共催していた経験が根底にありました。NHK学園高等学校は広域通信制の学校のため、在学中に友人や先生と顔を合わせる時間が少なくなる場合があります。一方、NHK学園高等学校はスクーリングで登校する日数が比較的多い生徒もいます。そこで、登校日にふらっと寄り道できるように、校内居場所カフェ「よりみち」で、飲物やお菓子を片手に、おしゃべりをしたり、カードゲームをしたりして、自然と会話や交流が生まれる場を提供することにしました。この活動を支えるボ

ランティアを公民館の講座で学んだ地域住民が担い、教職員と共に生徒の居場所を運営しています。公民館から「風が送られている」事例といえるでしょう。



鹿野諒太さん（NHK学園高等学校
校内居場所カフェ「よりみち」コーディネーター）



6 各グループによる話し合い

グループトークは、3つの事例を参考にしながら、「みなさんのグッドプラクティスを共有しましょう」をテーマに4～5人のグループで議論しました。第三課題別集会の参加者は約80名に及びましたので、18グループに分かれて話し合いを行いました。

グループでは、輪になって座り、ひざの上に「えんたくん」を乗せ、まず「名前・所属・ひとこと」を書き、その下に、それぞれが知っているグッドプラクティスに関わる「キーワード」を書き出しました。

以下では、各グループの議論の様子、また議論されたグッドプラクティスを3名の方から発表していただいた様子を、いくつか写真で紹介します。





7 閉会の挨拶;全体の総括

委員部会の野口泰寛部会長(国立市公運審委員)は、以下のようにまとめられました。

1月1日、北陸で地震が発生、多くの生命が亡くなり、沢山の市民が避難しています。北陸の公民館が避難所として活動し、市民や職員の方のご苦労は言葉には表せません。

その中でも今日若い新藤先生の講演、国立での若い方々の活動の報告を聞かせていただき、これからの公民館に期待できると感じました。

都公連の加盟が9市になっていますが、今日2月3日のグループワークの盛り上がりを目にして、何の不安も感じません。

市民と職員で協力して、「社会教育」という大きな課題にチャレンジしていきましょう。

北陸の公民館に避難中の皆様に、今日ご参加の皆様と共にエールを送ります。



閉会の挨拶をする野口部会長(国立市公運審)

※本稿は、委員部会の新井(東大和市公運審)、三木(昭島市公運審)、内海(狛江市公運審)、西原、野口、井口が分担して執筆し、事務局(国立市)の文責で全体を構成・調整しています。

アンケート集計結果

■回答数 125

《自由記述(意見・感想等)…原文ママ》

Q1. 所属を教えてください (複数回答可)

	①公民館 利用者	②公民館 職員	③社会教育 施設職員	④公民館 運営審議会 委員	⑤企画 実行委員	⑥その他
第一課題別集会	4人	26人	1人	7人	7人	3人
第二課題別集会	3人	13人	0人	7人	3人	2人
第三課題別集会	4人	21人	0人	18人	3人	7人
合計	11人	60人	1人	31人	13人	12人

⑥その他

【第一課題別集会】

- ・ 社会教育指導員
- ・ 市議会議員

【第二課題別集会】

- ・ 八王子市民
- ・ 市議会議員

【第三課題別集会】

- ・ 大学生
- ・ 町田市参加
- ・ 職員として参加
- ・ 市民
- ・ 任期付任用職員

Q2. 参加理由を教えてください (複数回答可)

	①大会自体に興 味・関心があった	②大会の内容(テーマ) に興味・関心があった	③講演者に興味・ 関心があった	④その他
第一課題別集会	19人	20人	1人	10人
第二課題別集会	13人	9人	3人	8人
第三課題別集会	14人	27人	4人	11人
合計	46人	56人	8人	29人

③ 講演者に興味・関心があった

【第一課題別集会】

- ・ 興味・関心があった講師名=山本裕美子講師

【第二課題別集会】

- ・ 新藤先生のお話が聞きたかった

【第三課題別集会】

- ・ 公民館の存続に不安があるので。
- ・ 委員部会を担当
- ・ 第3課題
- ・ 知人が参加していたので
- ・ 運審者側

④ その他**【第一課題別集会】**

- ・ 職員からの指示
- ・ 次期担当
- ・ 課題別学習会—Iに関心があった
- ・ 業務の一環として
- ・ 職員の紹介
- ・ 研修のために参加

【第二課題別集会】

- ・ 仕事
- ・ 業務として
- ・ 義務感から
- ・ 代理出席
- ・ 公民館からの要請

【第三課題別集会】

- ・ 国立公民館に一度来てみたかった。
- ・ 参加の要請があったため
- ・ 恒例の行事なので
- ・ 職務のため出席
- ・ 業務命令
- ・ 仕事

Q3. この大会をどのような方法で知りましたか (複数回答可)

	①ポスター・チラシ	②ホームページ	③各市の広報誌	④職員から	⑤友人・知人から	⑥その他
第一課題別集会	4人	2人	0人	32人	2人	5人
第二課題別集会	4人	1人	1人	14人	3人	7人
第三課題別集会	9人	0人	0人	31人	1人	9人
合計	17人	3人	1人	77人	6人	21人

⑥その他

【第一課題別集会】

- ・ 公民館の会議
- ・ 職場回覧
- ・ 会議で
- ・ 公運審会議

【第二課題別集会】

- ・ 仕事
- ・ 審議会での呼びかけ
- ・ 職場
- ・ 都公連より
- ・ 関係者

【第三課題別集会】

- ・ 委員部会の一員
- ・ 公運審委員より
- ・ 公運審にて
- ・ 委員会
- ・ 公運審

Q4. この大会への参加は何回目ですか。

	初めて	2回	3回	4回	5回	6回	7回	8回	9回	10回以上
第一	12人	9人	9人	1人	3人	0人	1人	4人	0人	2人
第二	3人	6人	2人	3人	3人	0人	1人	1人	0人	5人
第三	14人	19人	3人	4人	6人	3人	1人	1人	0人	1人
合計	29人	34人	14人	8人	12人	3人	3人	6人	0人	8人

【第二課題別集会】

10回以上 … 10回 2人 / 13回 1人 / 25回 1人 / 30回 1人

【第三課題別集会】

10回以上 … 14回 1人

Q5. 基調講演はいかがでしたか(複数回答者あり)

①より関心が 高まった	②考える きっかけとなった	③関心が沸いた	④印象に残った キーワードがあった	⑤その他
47人	59人	3人	13人	2人

【自由記述】

- ・ 「人が集まることによる落ち着きと共感をつくる」というキーワードにとっても共感した。
- ・ 共感、聞くことが大切なこと共感しました。
- ・ 若い世代の利用についての質問が多かったが中高年の利用率も下がっていることも研究して欲しかった
- ・ 「公民館」のイメージを変えることに様々な可能性と課題があると感じました。
- ・ 自分の思っていた公民館と異なる視点で考え方がかわった
- ・ 公民館活動は人がより人らしく生きていくための活動であることを再認識した。
人を思いやりつながる、誰でも気軽に立ち寄れる場
学びつつ学びの中で人の声に耳を傾けることが大事である
- ・ よくまとまった説明でした。理解しやすかった、再確認できた。
印象に残ったキーワード=講座のチラシの大切さ→資料として→資料室で活用
学生に公民館を知ってもらうことの意義、きっかけの大切さ、公民館学習の内容把握
- ・ 短い時間に大切なことが凝縮されていてとても濃い講演会だったと思います。いい講師をお招き頂きありがとうございました。三多摩テーゼ(二部)をよんでみたい
- ・ 先生の、学生が公民館を見たときの感想が新鮮でした。
- ・ 市民活動のアーカイブの重要性を感じます。“既成栽培できない積み重ね”を残すことが地域の歴史を垣間見ることも含め大切だとのお話に、その通り!!と思いました。
- ・ 「共感と落ち着き」は心にストンと落ちるような言葉でした
- ・ 福生市や昭島市の事例があって良かった。事例があると理解度が高まります。
- ・ 当日パワーポイント資料をQRコードから見られる点が良く、復習に役立ちます。
- ・ 公民館の役わり(将来においても)よくわかった!
- ・ 「個」からはじまり「公」を楽しむ、双方を楽しむことをつなげていく、初心に戻ってこれからも運営していきたい。
- ・ 非常にわかり易い講演でした。大変勉強になりました
- ・ あらためて、公民館のあり方を考える機会となった
- ・ 箱物施設、多目的ホール、楽しむ場所
- ・ 遠い人と近くなり、近いひとと遠くなった
- ・ 命には命をいやすちからがある
- ・ 次の10年を見据えて答申作成
- ・ 学生
- ・ 「個からはじまる」とは「共同学習」とは異なるチャプ台がえしだと思った
- ・ コロナ後の公民館の活用のヒントを得ました
- ・ 「人が集まる場所」「ロビーのにぎわい」のある公民館にしたいと思う
- ・ 公民館の機能を理論的に分析するというのは存じ上げない分野なので研究で深く学びたい。
- ・ 若い人に向けてどうアプローチしてゆくか考えるきっかけとなった。
- ・ とても分かりやすい講演でした。お話を聞けてよかったです。
- ・ 公民館と社会教育・生涯学習をめぐるイメージ、公民館の可能性など学生も交流し学生の声や学びについて紹介しながら、お話していただいたことがよかった。たくさんのヒントがあったような気がする。難しいが若い人の声を聴くことは大切である。

- ・ 地域を見つめ一人ひとりの話を聞く事、「個」の興味関心を「公」につなぐ専門職員の存在。
- ・ 公民館は人が集まるところ若い人から年配の方まで楽しく足を運べるとよい。
- ・ 連携の取り方、つながり方、公民館の使い方。
- ・ 第二部のパネルディスカッション迄の時間が全体的に長く、正直眠くなってしまった。グループワークの時間をもう少しかけたかった。何も分からず参加したが東京都があまり力を貸してくれないと分かり会費¥1000-の意味を納得した。次回も是非参加したい。
- ・ 今後の活動を継続していくうえで大変参考になり素晴らしい講演内容でした。有難うございました。
- ・ ④印象に残ったキーワードがあった一個から公へー
- ・ 社会教育の基本は「ヒトの話を聞くこと」という言葉が大変印象深かったし、自分自身も肝に銘じたいと思った。
- ・ 活動は個から始まるのに、公民館活動は団体が対象。キッカケづくりはよそでやってから自ら。
- ・ 公民館は個からの団体へのキッカケ作りそこからの方向性にしてほしい
- ・ 先生が公運審として学生さんとともに公民館を回り、公民館について考えていらっしゃるお話が印象的でした。他市においても学生さんと共に考える機会をたくさん持てるといいと思う。
- ・ 個から始まり～がとてもひっかりました
- ・ 公民館職のおもしろ味を再確認できました。
- ・ 「ハコモノ」は意外と面白い、というのが興味深かった。「なぜハコを維持することにこだわるのか」という立場にたっているの、その見地に至るまでの考え方の移ろいに興味がある。
- ・ 施設・箱物の定義について、新しい知見を得たように思う。機関というとらえ方だったが、もっとハードル低くとらえて、「場所があって、人がいて」が基本と思えた
- ・ たいへん内容の濃いわかりやすい内容だった。コロナを経て、今の課題と報告制を示して頂けてよかった。
- ・ 職員側も学び進化し続けないと…と改めて思いました。これからも市民の方の声を聴いていきます。
- ・ 三多摩テーゼの職員論については知りませんでした。個人が確立されていないと自治はおぼつかないと思いますので、まずは市民の方が個人として個を確立し、そうした市民による自治活動(=公)につなげていきたいと思っています。ありがとうございました。

6. 課題別集会について

(1) 参加した課題別集会は次のどれですか

- ① 第一課題別集会 … 46人
- ② 第二課題別集会 … 25人
- ③ 第三課題別集会 … 53人

6. 課題別集会について

(2) この課題別集会を選んだ理由や参加動機を教えてください

【第一課題別集会】

- ・ 講座の企画の参考になると思ったので
- ・ 山本講師の事例に興味があったから
- ・ 若者も参加する公民館事業という所に興味があったので
- ・ この事例を参考にさせていただきたかったため
- ・ 現場と最も近いテーマだと考えたから。
- ・ 人と人をつなぐしかけ、展開をあらためて考えていきたいと思って。
- ・ 公サポ委をやっている中で、自分が「公民館」についてわかってないことが多いと感じ、もっと考えを深め、より公民館を魅力的な場にできればと考えたことがきっかけです。
- ・ 世代を超え人と人をつなぐ、というところに興味がある。
- ・ 世代を超えたつながりってどうすれば良いのかのきっかけを知りたい
- ・ 内容に関心があった、本市にとっても考えたいところだった
- ・ 公民館のロビーの活用に興味があったため。
- ・ 現在とりこんでいない分野で興味があった
- ・ SDGSのテーマに興味がある
- ・ 自身の館のフリースペースで課題を抱えていたため 課題（人は集まるがつながりが生まれないところ）フリーwifi 飲食めあて
- ・ 公民館に人が参加してくれるアイデアを知りたかったため
- ・ 講座だけで終わらせない展開のヒントを聞きたかった
- ・ 私の自治体に公民館はありませんが、類する施設で社会教育指導員としてどのような仕掛けができるのか参考にしたいと思いました。
- ・ “世代を超え人と人をつなぐ”というキーワードに惹かれた
- ・ 世代を超え人と人をつなぐ仕掛けや展開のある事業、とても大切な事業である所以他市でのあり方を聞いてみたいと思った。
- ・ 多世代交流は核家族化やひとり暮らしが増すなかで重要な取り組みだと思ったから

【第二課題別集会】

- ・ 元調査研究班のメンバーだったから
- ・ 都公連のあり方に興味があった
- ・ あり方検討会の内容をさらに深めたいと思ったので
- ・ これからの公民館のあり方について、現状がどういう検討がされているのか知りたかった
- ・ 都公連の組織についてあまり認識していなかったので、学びたいと思いました
- ・ タイムリーな「課題」でした
- ・ 公運審委員として、他地域との交流ができればと
- ・ 都公連についてあらためて考えてみたかった
- ・ 富田さんがいるから（笑） 本当は都公連ってよくわからないから、ちゃんと知ろうとして
- ・ 都公連の存在意義と存続が危ぶまれる中で、本質に立ちかえる機会が欲しいと思った

- ・ 都公連の今後が心配
- ・ 一番自分が知らない内容であったため
- ・ 梶野光信講師が欠席で、都公連の未来のあり方の話しが全く不明で、討議しようがなかった。特に、議題が理解できれば話し合えたと思います。
- ・ 業務上の必要から
- ・ 「あり方検討会」の内容が知りたかった

【第三課題別集会】

- ・ 多様性を大事にした講座、多様な方へ向けた講座はどんな内容なのか事例発表とともに聞いてみたかった。
- ・ 「多様な人がつどい学びあう」の様々な仕掛けづくりや空間づくり、機会提供に関する工夫の在り方などを学びたかったから。
- ・ 多様な人の公民館参加に興味があったから。
- ・ コロナが五種に移行し市民のサークル活動はだいぶ以前に戻ってきているが、コロナ禍で活動が出来なかったこともあり、サークルの高齢化が進み継続意欲をそがれる等で解散する団体さんも増えています。そのような中、若い世代、子供にも公民館を利用してもらえるようにするヒントにしたかったため。
- ・ 国立の事例を改めて聞きたかったこと。
- ・ つながるためにはどうしたらよいかヒントが欲しかったため。
- ・ 公民館職員となり丸2年たつが、多様な世代（特に現役・若者）を公民館の関わりを持ってもらうためのコツ・ヒント知りたいと思ったため。
- ・ 公民館利用者にとって一番身近なテーマだったので。
- ・ 公民館外部の方の意見を聞きたかったから。
- ・ 中高生をもっと呼び込みたい。
- ・ 多様な人が集う場所にするためにどうすればよいか、考えるヒントにしたいため。
- ・ カフェ、サロンなどの活動を聞きたかった 運営方法など具体的に
- ・ 課題テーマが、まさに今の公民館の課題であると考えから「多様な人が集い、学び合う公民館への挑戦」
- ・ 公運審での審ギの課題となっていること
- ・ 多世代で学ぶ公民館について学びたいと思った
- ・ 20代～40代の方がなかなか公民館には来ない。実際に活動されている方の声を聴き参考になればと思った。
- ・ 地元であったため
- ・ これからの公民館をどうしていくか、20代、30代などの活動の様子から学べる事を期待しました。
- ・ 公民館での活動を広げ、地域のつながりを強めたい
- ・ 「多様な人々がつどい」に興味と、どうしたら集えるのかを実例を伺い取りくみ方を学び、実践へつなげたい
- ・ 近隣市である国立市の事例を知りたかったため。そのまま取り入れられなくてもエッセンスが何かしらいかせたらと思いました。

Q6. 課題別集会について

(3) 参加した感想を教えてください

【第一課題別集会】

①とてもよい	②よい	③普通	④あまりよくない	⑤よくない
19人	20人	2人	0人	0人

【印象に残ったキーワード】

- ・ ロビーの見える化、見せる化/ 楽しさを共有すること
- ・ 生涯学習のイメージに捉われず、これからも、これまでも公民館は何でもあり。
- ・ 地域を見つめていく1人1人の声を聞く事
- ・ 公民館事業の見える化、時代を越える、中学生・高校生
- ・ 見える化→見せる化、世代を超えた学び
- ・ 活動の見える化
- ・ 地域の人と子どものつながり
- ・ 思いきり話す、ゆるく続ける
- ・ コミュニティアシスタント、思いきり話す、見える化
- ・ 中学生の参加
- ・ 中学生ボランティア
- ・ 幸せ感
- ・ 人と人とのつながり
- ・ 地域コミュニティの原点は楽しい時間を共有すること
- ・ 中学生の参加、公民館事業の見える化
- ・ 参加型、話せる、行き交う、共感、共有→幸せ感(公民館ならではの)
- ・ 中学生と公民館、win-winの関係
- ・ コミュニティアシスタント制度、児童館・学校との連携、win-win、地域人材の活用

【気づき・学び】

- ・ 活動の見える化により参加の後でも楽しいの共有ができPRにもつながる
- ・ 公民館に来たことのない人にいかに公民館に入ってもらうか。
待っているだけでなく積極的にアピール、発信していくことが大切。
- ・ 公民館には可能性がありいろんな事にしられる必要はないしチャレンジしてもいい場所であるということ
- ・ 部屋の中で講座をするのではなくロビーで行う。
- ・ 公民館は楽しいところ
- ・ 新しい形態(複数のテーマを同時併行)の講座
- ・ 事業の見える化
- ・ 若手の参加は昔からの課題であることを気づいた
- ・ 自分たちだけの視点でなく、多様な視点を大事にする、自由な学びでつながりをつづける事の大事さ

- ・ 大切なことはwin-win、壁をとりはらうこと、同じ人が何度も集い共感共有すること
- ・ 地域の中学生と地域団体を公民館を通してつなげることで地域を活性化させてるように感じた
- ・ 自分のできること、役立てることを知る 頼られることの喜び⇒幸せ感につながる
- ・ 中学生を講座に参加させる(方法)やり方、やる気にさせるコツなどこんな方法があるんだと学んだ
- ・ 中学生が楽しんで参加するオープンで話しあうことができる様にロビーで開催したこと
- ・ 改めて事業に参加して楽しいということ、それを共感する、そして次に継続できるように仕掛けていく
- ・ ゆるく続けること、見せ方見え方の視点を考える
- ・ 若者を公民館に呼ぶアイデア
- ・ 中学生と地元の高齢者が互いに学びあいながら事業につなげていき、多世代交流になったのが良い
- ・ 楽しい時間の共有、一人ひとりが暮らしや文化を学び地域で社会がつくられ発展していく、とても大切
- ・ 公的施設という安心感、ロビーの使い方の工夫

【ご意見・ご感想】

- ・ 運営、進行の段取りは良かったと思う。
- ・ 事例がとてもおもしろかった。中学生のイキイキした活動が見えてくるようでした。こういうつながりを作っていくためにも職員の存在は大きいと思います。
- ・ さまざまな場所から集まった方々の知見、知識、発想に触れることができました。
- ・ “えんたくん”いいなと思いました。
- ・ 人が集えば安心感があり、そこに共感も生まれる。発見もあるという事が嬉しいです。様々な方が利用される公民館だからこそ、いろいろな人の話を今後は沢山聞いていきたいと思いました。
- ・ 実践事例の説明について、内容はとても参考になりましたが説明の速度が速かったです。
- ・ 細かい分単位にアナウンスはグループワークの妨げでした
- ・ グループ内での発表の時間が短い
- ・ グループワークはとても苦手でしたが、同じグループの方々のおかげで、自由におしゃべりできました!!
- ・ 公民館の学びが必要なことは理解できるが、時代的に変革期であることも認識が必要
- ・ 色々な意見を聞くことができ。今までにない視点での考え方を学ぶことができた
- ・ 事業を考えるうえでのポイントを考えるきっかけになった
- ・ 一方通行の講座だけでなく自分の思いを語ることで気持ちが行き交う<参加型> 学んだことを生かして人と人がつながるきっかけとなる講座を作っていきたいです
- ・ 他市の実践している事業などいろいろな方の意見が聴くことができ、今後の講座企画のヒントになることが得られたので良かったです。
- ・ ゆるくずっと続けることが大事ということが大事ということを楽しくグループワークできた。

- ・ このような継続的な複数のテーマでの講座を多くの人と取り組み、特に中学生が協力参加した講座をやり遂げ、たいしたものです。すごいですね。
- ・ 少人数でも良い、小さな数からやっていこう。とにかくおもしろい企画、見える化が大事だと思います。

【今後の活動や業務に生かそうと思ったこと】

- ・ 部活動との連携について多様な講師に依頼する
- ・ 講座内容をロビーにも展示し、知らせていくこと
- ・ 小さな対話から、周りの話を聞き広げていければと思います。
- ・ 思った事、考えた事を実行する為にどうするかをいろんな人から話を聞いて情報収集をしていく事から始めたいです。
- ・ 学校との連携、交流を進めていきたいと思いました
- ・ 各自関心のあるテーマを思いっきり話せるような場をつくる！
- ・ 講座だと一方的になってしまうので、ロビーを活用することは面白いです。
- ・ えんたくんの利用、多世代の人々を誘ってみたい。
- ・ ロビーで中学生の話しあいは少しハードルが高いが公民館祭りで演踊してくれている団体の存続が難しくなっているのので、ロビーで体験談+サークル活動宣伝はすぐやってみたい
- ・ 小学生、中学生、高校生、大学生（専門学校生）が公民館に来て、将来大人になっても公民館に来て活動するという流れにつながる仕組みを公民館がつくっていくとよい
- ・ 中学生、高校生にコミュニティアシスタント制度、とりくんでいきたい。
- ・ 子どもの声を聞いて企画に活かしていく

【第二課題別集計】

①とてもよい	②よい	③普通	④あまりよくない	⑤よくない
10人	6人	3人	0人	1人

【印象に残ったキーワード】

- ・ 連携
- ・ スリム化
- ・ 意見交換、情報交換を深めたい
- ・ 個→公
- ・ 個と公をつなぐ
- ・ 審議会は市民として発言していい！どっかの市が都公連をやめたとき、知らなかったって時、自分なら「やめたくない」って言っていってことを知った（審議員が）
- ・ 「自治会に似ている」（その存続が危ぶまれている）
- ・ 会話
- ・ 個からはじまる社会教育
- ・ 個
- ・ 公民館の今後について

【気づき・学び】

- ・ 都公連のあり方
- ・ 職員の立場、非常勤の立場、委員の立場、それぞれに対してどうあるべきか深めてゆきたい
- ・ 色々な立場の方の話を聞くことができた
- ・ 若い人は公民館をどう考えているか
- ・ 職員や他市公運審委員と話しあいができ、情報交換ができてよかった
- ・ 他市を知れた
- ・ 「職員の仕事量が多すぎる」けれど続けたい
- ・ 都公連に力強さが足りないのは、市民にアピールできる存在理念が確立できていないからではないか
- ・ 連携、つながりの強化が必要
- ・ 都公連の組織のあり方の苦悩、不安が分かりました

【ご意見・ご感想】

- ・ 都公連の報告を受けて、課題を話し合うこととなっていたが、それがなく、何を話していいかわからなかった（何をやっているのかよく分からなかった）
- ・ 考えがまとまらず、もやもやしています。これから公民館はどうするべきか、どうなっていくのか
- ・ 都公連加盟自治体が減ってきたことにおどろくとともに危機感を改めてもちました
- ・ 第二課題別集会に参加したが、都公連のことをもう少し知りたいと思った
- ・ 毎年ではなく3年おきとかだと主催者の負担が減るのではと思いました
- ・ 他市の職員の方の様子が良く分かった
- ・ 他市の（多摩ではない人まで）発言をたくさんきけた。それがすごくよかった
- ・ ワークでの話し合いて、本音で話せた

【今後の活動や業務に生かそうと思ったこと】

- ・ 自分の働く市に持ちかえて問題を共有したい
- ・ うまいいえないけど、今日のことを胸にがんばります！
- ・ 公民館への若者参加は、大きな課題です。具体的に活動している活動例をお聞きしたいです。ロビーなどの利用だけでは厳しい環境下にあります

【第三課題別集会】

①とてもよい	②よい	③普通	④あまりよくない	⑤よくない
31人	13人	4人	0人	0人

【印象に残ったキーワード】

- ・ 風が回る、風と遊ぶ、公民館
- ・ 共感と落ち着きの大切さ、「個」から始まり「公」へ、風を入れる、風をまわす、風をおくる
- ・ 風を入れる、まわす、おくる。居場所づくり。
- ・ 公民館の風通し。
- ・ 共感と落ち着き。

- ・ <基調講演より>遠い人と近くなり、近い人と遠くなった。(学生からの一言):まさに共感!
- ・ 結節点としての公民館
- ・ ボランティアする側の人のがのびのびと活動ができる環境が大事。
- ・ 個の関心を公につないでゆく場所
- ・ 「個から公へ」「グッドプラクティス」「交流」
- ・ 公(=団体) 私(=個人) 始まりは個、風とおし
- ・ 個から始まり公へ ～一人でいることと誰かといること双方を楽しむ～
- ・ 共感
- ・ 「個」からはじまり「公」へ
- ・ ナナメの関係性、風を入れる
- ・ 「広辞苑」での「施設」の意味
- ・ 誰にでもできる(ようにする)こと、続けること、
- ・ 公民館を風とおしの良い場所に／公民館に風のあそび場
- ・ まずは一回目をやってみる

【気づき・学び】

- ・ 基調講演で新藤先生が「学びを活動に組織化していく専門職員がいる公民館は、単に貸館をしているセミコンとは大きく違う」と説明されていたことが新たな視点での説明で新鮮でした。
- ・ 国立の取り組み発表者に公民館の未来を感じた、どの取り組みも楽しそう。
- ・ 講座をきっかけに新しい流れを育てることの重要性。
- ・ 風を入れる、まわす、おくる。居場所づくりの視点等の大切さ。
- ・ “公民館の風とおし”という考え方。
- ・ 人のつながり、循環の事例がとても参考になりました。
- ・ 続けることが人が集まる原点につながる。
- ・ 様々な事例を知ることが出来た。可能なら全部知りたかった。
- ・ <基調講演より>公民のあり方について「命と暮らしを守る学習」「共感と落ち着き」「不要不急」ではない。
- ・ 人と人をつなごうとする方が熱意を持ってたくさんおられることを知りました。
- ・ 職員は干渉しすぎない。
- ・ オンラインは身体的に疲れる。対面と違うストレスがある。
- ・ 学校教育、家庭教育でもない社会教育。ニーズによりすぎると「エンタメ」「インフラ」「福祉」と変わらなくなってしまう?公民館は「何をすべき?立場は?」このことを職員は心に留め置くべきかと感じる。
- ・ 人(市民)が学びに参加できるきっかけは、“誰にでもできる” 開かれていると、まず思われること。途中に、困難が見えたら、できるような方策をみんなで考えること。(でいすこ、書字障害、ボッチャなどの事例から)
- ・ 私を大切にする:人を幸せにする
- ・ どうやったら続けられるか考える ・ボランティアは参加しないという選択もある
- ・ 公民館がより地域にとって必要にこたえられるものになろうとしているのが分かりました

- ・ 公民館の役割、自主、中（内側）から、市民から湧き出てくる学びの意欲を高め実現していきたい。
- ・ 日々、グッドプラクティスをさがす。改めて市民の方の話をきくこと、個から公へ広げること、
- ・ 学びの前に楽しいがあることが大切だなと思います。

【ご意見・ご感想】

- ・ 今日の研究大会のような在り方が公民館の学びの在り方そのものだと感じました。まさに「個」から「公」へ、人づくり、地域づくりを担う公民館のカタチだと思いました。
- ・ なぜ登壇者が全員男性なのでしょう。
- ・ 様々な事例、紹介、グループ内での話し合いで様々な情報を知ることが出来て良かった。
- ・ 他市のグッドプラクティスをグループワーク他で聞いたことがよかった。
- ・ 進行の間瀬さんの進行も事例発表者の皆さんのお話も大変わかりやすく良かったです。
- ・ 第二部、3人の方（パネラー）の事例をお聞きし、より若者など普段公民館利用の少ない層を公民館と関わってもらうには、「風通しのよさ」が大切だと実感した。
- ・ 普段の疲れが取れました。
- ・ 大変学びになりました。ありがとうございます（協議会が守られますよう、そこが気になりました）。
- ・ 今日の参加者は公民館のファン（根強い）が、公民館のよさを理解しているのは、市民の中ではマイノリティ。もっと多くの市民に知らせる、伝える（公民館の良さ）事が重要と痛感。
- ・ 人が集まり、学びあう公民館にするためのきっかけになりました。
- ・ 公民館存続の危機 必要性の共有化を どう導いていくか？ 団体のみ、縛りがある→自縛になる
- ・ 中高大学生が参加している例がたくさん聞けて良かったです
- ・ 外からの「風」が公民館に入り、もともと公民館で活動している「土」とまざりあいその公民館の「風土」ができるのだと思った
- ・ 基調講演、楽しかったです。脳が活性化されました。
- ・ 風を入れる、まわす、おくるを実施したい気分です。
- ・ 人が集まることが目的ではなく、集まった人と続けていくことが大切。人々の要求（声になっていない声）をつかみ、社会をよく見ていることが肝要。
- ・ 様々な熱を入れた取り組みがあることを知り公民館の未来を感じた。パネリストが若者だったことが良かった。
- ・ 市民の方に協力していただき子ども向けの事業にいろいろ取り組んでいるが、子どものうちから公民館楽しいところだよと知らせてい続ければ、いつか戻ってくるんだな…と思いました。
- ・ 各地域（多摩地域）で活動している人達とのつながりを持てる機会が欲しい。
- ・ 事例の素晴らしさと、グループワークメンバーの多様さで楽しい時間だった

【今後の活動や業務に生かそうと思ったこと】

- ・ 大学の学生団体を通じて多摩の公民館中心の地域作りにアプローチしたい。
- ・ 講座を発展させて、グッドプラクティスにできるようにがんばります。
- ・ 公民館職員を対象とした研修の機会を提供する立場でもあるため本日の学びや事例等を活かして業務にあたっていきたいです。
- ・ 人集めなど苦しい所もたくさんありますが、参考にして若い人にもっと来て欲しいと思います。
- ・ チャレンジすること。
- ・ 弱者のための公民館を！
- ・ 無理せず継続。
- ・ めげずに個人を大事に、人とのつながりを大事にしていきたい。
- ・ 事業の参加集めは「声かけが大事」とあったので、改めて努力しようと思った。
- ・ 他の公民館職員のグッドプラクティスを広め、伝えてゆくことが大切。
- ・ テーマがよかったので具体的に生かしたいと思います。
- ・ 事例を知らなすぎた。もっとインプットしないと良いアウトプットにつながらない。
- ・ “箱物にならない”横のつながりがあるように努めたい。
- ・ “風”のたとえに続くのは、動詞でした。その主体をよく考えていきたいです。
- ・ 柳沢ディスコ とり入れてみたい
- ・ 市民の方に協力していただき子ども向けの事業にいろいろ取り組んでいるが、子どものうちから公民館楽しいところだよと知らせてい続ければ、いつか戻ってくるんだな…と思いました。
- ・ 相互連携
- ・ とにかくやってみよう、だれかが助けてくれそう
- ・ 風通しのよい公民館について館内で共有したい
- ・ まだ3年目の職員なので、グッドプラクティスの種を育てていけるように、息の長い事業継続を考えていかないといけないなと思いました。(が、職員が異動すると継続が難しくなるものもあり…)

Q7. 今後の研究大会について、どのような形式がいいと思いますか**(1) 全体の時間**

- ①1日開催(2020年までの形式:午前 基調講演+午後 課題別集会) … 3人
- ②午後のみ(今年の形式:基調講演+課題別集会) … 37人

(2) 基調講演の会場

- ①1か所に集まる(2020年までの形式) … 11人
- ②課題別会場ごと(配信含む) … 25人

Q8. 大会全体を通してのご意見・ご感想など、ご自由にお書きください

- ・ 社会教育の難しさはあるが、それぞれの時代で常に課題として学んでより良くしていこうとする事がとても大切なんだと思いました。
- ・ 若手の参加者を増やすことに工夫をする必要性を感じた
- ・ 職員の意識の高さが伺われた。当市でも職員の研鑽を高めたい。
- ・ 始まりが早い13時からの方がいい、終わるのが遅い16時がいい
- ・ Q7(2)について①は部屋数や広さがあるなら良いが②でもいいと思います
- ・ えんたくんはとてもいいアイデアですね。
- ・ 資料室の活用～①今まで実施した講座のチラシを資料室に展示しておく(公民館事業の資料室見える化)②16mm映写機も置いて展示するのもおもしろい(公民館の歴史を知ることができる)
- ・ 今回一般で応募させていただきました。今後も参加させていただけるとありがたい。すばらしい
- ・ 研究大会は午後のみ1か所でよい。課題別集会は3つもあると、他の課題別集会に参加したくても参加できないので1つで十分。もしくは、基調講演だけで十分。
- ・ 1か所だと会場に入りきらないので、会場に来られない人はZOOM配信にすると自宅でも聴けて良いと思う。
- ・ これからの公民館は、というテーマで講師選びは大切である、どんな講師をまねているかなども聞いてみたい。人気のある講師、演題など
- ・ えんたくんを使ったことで、適切な距離を保ちつつも会話が盛り上がりとてもよかったです。
- ・ 準備の負担をより軽減したいですね
- ・ 今回は2会場に分かれて、参加しやすかった
- ・ 今後も継続して下さい
- ・ 都公連の存在が心配です
- ・ 他市の職員の方との交流は楽しい
- ・ 自分が来るなら負担とか思わず、その時を楽しんでほしい。自分の時間は自分で都合つけて、自分の感情も自分で都合つけて、”デメリット”とかにするのは自分のきもちだ!
- ・ グループワークで本音で話せたのが良かった
- ・ 普段中々じっくりと学ぶ機会がないため、貴重な機会となった
- ・ 時間通りの運営をされて感謝します
- ・ 国分寺市の皆さん、おつかれ様でした
- ・ 今日の内容をもっと掘り下げて話したい。
- ・ 公運審の方々と職員の方々が協力して大会を運営している姿が本当に素晴らしいと思いました。大変勉強させていただきました。ありがとうございました。
- ・ 他市の若い職員のお話が聞けて良かった。
- ・ 運営委員の皆様お疲れさまでした。
- ・ スタッフの皆さま、ありがとうございました。
- ・ 多くの参加でグループワークも盛り上がりいろいろ知り得ることができました。

- ・ スムーズな進行、ファシリテーション、参加してストレスなく素晴らしかったです。
- ・ 公民館の減少が心配です。
- ・ オンライン映像での基調講演が別会場でできるなら都公連加盟公民館の各地域(地元)から参加することも可能？
- ・ 2年に1回でいいと思います。
- ・ グループディスカッションは少人数に限ると感じました。当然の事ながらグループ発表の数は限られます。
- ・ 基調講演も勉強になりました(基本的な知識の吸収)。3つの事例も具体的でしたので参考になりました。初めてのグループワークで盛り上がり、楽しく学ぶことができました。
- ・ 準備等ありがとうございました。
- ・ 60回のつみかさねはとてもすごいことだ。改めて実感しました。都公連の組織の見直しに期待しています。
- ・ 丸1日にして午前・午後の部にしてはどうでしょう？(来るためにお昼ご飯を10:30に食べなくてはいけなかったのも…)
- ・ 大変勉強になりました。ありがとうございました。
- ・ 都公連は内向きですね。専任し職員とそのOBの互助組織。市区で残された9市はどうして残れた考えた方がよいかと。☆各人にパネルを用意して下さい。
- ・ 公民館をなくさない!!
- ・ 12:30~16:30通してはつらい。昼食休憩があるとよいかなと。
- ・ 情報の共有。「研究大会」でなくてもっと気軽さが必要では